

梅園三語 玄語 第三冊

天冊立部

安永四年本準拠

三〇二三

玄語げんご

日本にっぽん 鎮西ちんせい 三浦みうら 晉すむ 安貞あんてい 著ちよ

三〇二四

天冊てんさつ

立部りつぶ 本神ほんしん

三〇二五

本神ほんしん

精奉せいほう 氣保きほ して之これ を成せいす

並びならに圖ず

三〇二六

鬼神きしん

性通せいつう 情感じょうかん して之これ を成せいす

並びならに圖ず

三〇二七

體用たいよう

體立たいた 性具せいぐ して之これ を成せいす

並びならに圖ず

三〇二八

造化ぞうか

氣營きえい 物養ぶつよう して之これ を成せいす

並びならに圖ず

玄語

日本 鎮西 三浦 安貞 著

天冊 立部本神

本神 本

三〇三三

鬱淳は混淪を以てせざれば、則ち歸する所靡し、

三〇三四

混淪は鬱淳を以てせざれば、則ち運する所靡し、

三〇三五

以てせざれば則ち成る所莫きは、則ち一なり、

三〇三六

之を以てすれば則ち歸運するは、則ち二なり、

三〇三七

一なれば則ち待む可きの佗無し、故に其の然る者は自なり、

三〇三八

二なれば則ち待つ所の一有り、故に其の然る者は使なり、

三〇三九

是を以て。二なれば則ち、鬱淳は能く活し、混淪は能く立す、

三〇四〇

一なるを以て、鬱淳は混淪を活し、混淪は鬱淳を立す、

三〇四一

鬱淳は氣なりと雖も、物は之を吐せず、

三〇四二

混淪は物なりと雖も、氣は能く之を食す、故に

三〇四三

鬱淳も亦た之を有するの天有り、

三〇四四

混淪も亦た之を容るるの地有り、故に

三〇四五

混淪は之を開けば、則天則地、

三〇四六

鬱淳は之を開けば、則神則天、

三〇四七

天は則ち没して而して通塞す、

三〇四八

地は則ち露して而して覆載す、

三〇四九

神は則ち麓にして而して活立す、

三〇五〇

天は則ち精にして而して有開す、

三〇五一

有せざる所莫し、開かざる所莫し、是を以て、天貌は此の如し、

三〇五二

活せざる所莫し、立せざる所莫し、是を以て、地體は此の如し、

三〇五二^{*}1復

故に物の立する所は則ち神、是を以て、神は爲せざる所莫し、

三〇五二^{*}2復

神の活する所は則ち天、是を以て、有せざる所莫し、

三〇五三^{*}

立するや則ち天も亦た地なり、

三〇五四^{*}

活するや則ち地も亦た天なり、

三〇五五―五六

合處は罅縫を没す、故に天は精没して其の神を有す、

三〇五七

地は麓露して其の天を開く、

三〇五八―五九

分處は條理を見す、故に天は其の徳を有開す、

三〇六〇

神は其の道に爲成す、

三〇六一

天中は神を物にす、

三〇六二

物中は神を氣にす、

三〇六三

物中 神を氣にする者は、本神の活立なり、

三〇六四

天中 神を物にする者は、天神の爲成なり、

(天はを欠くか。)

三〇六五

地も亦た天なれば、
則ち神神即一なり、

三〇六六

天も亦た地なれば、
則ち天なる者は即ち本なり、

三〇六七―六八

本と一なり、
故に宇宙も亦た天地、

三〇六九

本神も亦た天神、

三〇七〇―七一

能く二なり、
故に宇宙轉持、

三〇七二

天地水火、

三〇七三

天神道德、

三〇七四

本神體用、

三〇七五―七六

剖析盡きず。
物にして條理整齋す、

三〇七七

事にして交接錯雜す、
故に

三〇七八―七九

一天一地。
天は神を有す、

三〇八〇

地は天を開く、

三〇八一

之を有し之を開く、

三〇八二

之を活し之を立す、
是に於て。

三〇八三

天神は本神を岐す、

三〇八四

天地は宇宙を岐す、

三〇八五

天は氣にして而して神物を有開す、

三〇八六

地は物にして而して神物を活立す、
故に

三〇八七

本は立ち神は活すよりすれば、則ち物は物にして而して神は氣なり、

三〇八八

天は有し神は開くよりすれば、則ち天は氣にして而して神は物なり、

三〇八九

神を物にするの天は、精にして有せざる所莫し、

三〇九〇

精と雖も已に有せざる所莫ければ、則ち天も亦た地に於る地なり、

三〇九一

神を氣にするの本は、麤にして立せざる所莫し、

三〇九二

麤と雖も已に立せざる所莫ければ、則ち本も亦た神に於る神なり、是に於てか。

三〇九三

一即一

三〇九四

一即一

三〇九五

天は有せざる所莫し、

三〇九六

神は露せざる所莫し、

三〇九七―九八

故に天は神本を有す。活を開き立を開く。其の體は則ち一一なり、

三〇九九

其の性は則ち分合なり、故に

三一〇〇

大物は一を全す、故に活立は自ずから成る、

三一〇一―〇二

會易は二を立す、故に活立せしむるを爲す、是を以て混淪は能く立す、

三一〇三

鬱淳は能く活す、

三一〇四

大は能く小を含む、

三一〇五

小は能く大に資る、

三一〇六

小物と雖も。已に其の一を成せば。則ち鬱淳混淪。資りて己の有と爲す。

故に

(PA 241)

(I 416a)

三〇七

一の二を分つ、反を以て偶と爲す、

三〇八一〇九

小の大に資る、應を以て己を成す、

故に己に有する者は、天より資る者なり、

三一〇

己に在る者は、天に反する者なり、

三一〇

本氣は混淪の物を立す、

三一〇

神氣は鬱淳の活を運す、

三一〇

本氣は。天地含易を以て體と爲す、

之を天に奉じ、之を己に保する者は、其の性なり、

三一〇

網緼給資を以て用と爲す、

之を己に知り、之を佗に運する者は、其の才なり、

三一〇

一體一性。體は用を具す、

三一〇

性は才を活す、故に

三一〇

本氣の立は。能く其の神を奉ず、

三一〇

能く其の物を立す、

三一〇

活すれば則ち爲す、

三一〇

成すれば則ち立す、蓋し其の立するや。

内は能く持を有す、

三一〇

外は能く保を有す、

三一〇

保なる者は、天の用なり、

三一〇

持なる者は、地の用なり、

三一〇

外より保すれば、則ち内より護す、

三一〇

外に於て持すれば、則ち内に於て守す、

三三〇

成る所に保護持守するは。則ち天と萬物と同じ。故に。

三三一

大物は、則ち天轉は外より地を保す、

三三二

地持は内より天を護す、

三三三

地止は内に於て守す、

三三四

天容は外に於て持す、

三三五

人は、則ち氣は外より身を保つ、

三三六

質は内より外を持す、

三三七

精は内に於て守す、

三三八

皮は外に於て持す、

三三九

營なる者は、天に綱縊し、人に運爲す、

三四〇

養なる者は、天に相い給し、人に飲食す、

三四一

氣は保すれば、則ち營養に用有り、

三四二

精は奉ずれば、則ち知感に運有り、

三四三

混淪の體は、其の神を運せずんば、體具して用せず、偶人の機關を失するが若し、

三四四

鬱淳の神は、其の物を體せずんば、氣動きて託す無し、大虚の風颿を起こすが若し、

*三四五

保營なる者は、氣の物を守るなり、

三四六

奉運なる者は、物の氣を出すなり、

三四七

奉ずる者は、一精一力なり、精は奉ずる有り、力は役する有り、

三二四八

運うんする者ものは、一神一靈いちしんいちれいなり、靈れいは知しる有あり、神しんは通つうずる有あり、

三二四九

臣しんは以もつて君くんを奉ほうず。其その奉ほうずる者ものは外そと、以もつて保ほする有あり。

三二五〇

内うち、以もつて護ごする有あり。

三二五一―五三

之これを持じし。之これを守しゅず。是ここに於おいて其その君くんなる者ものは。外そとは藩屏はんぺいの保ほ有あり。

(I 416b)

三二五四

内うちは傳保でんぼの教きよ有あり。

三二五五

鎮重ちんじゅうは以もつて之これを持じず。

三二五六

法度はつとは以もつて之これを守まもる。故ゆえに

三二五七

君くんの明めいは。蔽おほう所ところ無なく。其その聡そうは塞ふさぐ所ところ無なし。

三二五八

君民一體くんみんいつたい。士しは事じに勤つとむ。

三二五九

農のうは耕こうに力ちからす。

三二六〇

工こうは職しやくに走はしる。

三二六一

商しょうは交こうに走はしる。

三二六二

此これ之これに給きゅうす。

三二六三

彼かれ之これに資とる。則すなわち其その養ようなり。

三二六四

意いは以もつて思おもう。

三二六五

技ぎは以もつて爲なす。則すなわち營えいなり。

三二六六

人事じんじの然しかる所ところは。廼すなわち天てんの給きゅうする所ところなり。

三二六七

應おうずる所有ところあるに慣なれて。資とる所ところを採さくらざるは。

(其のを欠くか。)

(PA 243)

三六八

流れを渉りて原を知らざるが若きなり。

三六九

既已に其の資る所を得る。

三七〇

此に君民と言うは。其の一端を擧ぐるのみ。

三七一

夫れ混淪は實體を以て立す、

三七二

之に幹する者は、其の實體の立を營して、而して以て經に行く、

三七三

鬱淳は精氣を以て活す、

三七四

之を運する者は、其の鬱淳の活を運して、而して以て緯に立つ、

三七五

之を保し之を奉ず、

三七六

之を營し之を養す、

三七七

地なる者は會結なり、

三七八―七九

日なる者は易聚なり、是を以て。地は、易を天より喻いて、而して地に噴く、

三三八〇

是を以て。景なる者は、日の會の氣を噴く所なり、天は、會を地より喻いて、而して天に噴く、

三三八一

是を以て。水なる者は、地の易の質を噴く所なり、

三三八二

是を以て。火は水中に生ず、

三三八三

火は水中に生ず、

三三八四

火は喻えば則ち溼を生ず、

三三八五

水は喻えば則ち乾を成す、

三三八六―八七

是の故に日は近づけば、則ち雨澤浮潤す、

三八八

三八九

三九〇

三九一

三九二

三九三

三九四

三九五

三九六

三九七

*三九八

三九九

四〇〇

四〇一

四〇二

四〇三

四〇四

四〇五

是を以て。水を以て火に灌げば、
則ち火は水を喩う、
日は遠ざかれば則ち水液枯涸す、

火を以て水を煮れば、
則ち水は火を喩う、

水の火を喩うや、其の可に適えば、
則ち其の體を養う、

其の量を過れば、
則ち其の體を失う、

火の水を喩うや、其の可に適えば、
則ち其の體を養う、

其の量を過れば、
則ち其の體を失う、

火山熱池、雨を得て燃ゆ、

炭火油燈、水を含みて存す、

給資は以て相い養うなり。

是を以て。動植は同じく保營を有するなり、
而して

動は則ち牡に發して、
而して牝に收む、

植は則ち華に發して、
而して實に收む、

網縊の營は、
進む者は生ず、

去る者は化す、

天地は給資す、

会易は網縊す、

本は能く其の體を保す、

三二〇六

神は能く其の氣を運す

三二〇七

保は以て之を洪曠に立つ

三二〇八

奉は以て之を悠久に行う

三二〇九

之を保し之を奉ずる者は。精なり。

三二一〇

精なる者は。物中に隠るる者なり。氣物は已に立つ。而して

三二一一

其の神を奉じて、之を知運せ使む、

三二一二

其の物を保して、之が性體を成す

三二一三

一なるや以て之を奉ず

三二一四

二なるや以て相い役す

三二一五

經を行く

三二一六

緯に立つ

三二一七

動靜通塞す

三二一八

網緼給資す

三二一九

一の爲に其の才力を伸ばして役を執るに非ざる莫し。而して

三二二〇

其の權は全く精に在り。蓋し

三二二一

一なる者は自から成る

三二二二

散ずる者は依りて成る 故に

三二二三

混淪の體

(PA 244)

(I 417a)

三二四

鬱淳の神、

三二五

洪曠に窺せず、

三二六

悠久に疲れず、

三二七

轉換の體、

三二八

倏忽の神、

三二九

小天地に畫す、

三三〇

小天地に盲す、

三三一

小と雖も、而も鱗比は断たず、

三三二―三三三

小と雖も、而も天地を悉く具す、則ち神は洪曠に通ず、

三三四

體は悠久に傳わる、

三三五

給する者は闕さず、

三三六

資する者は何ぞ盡さん、

三三七

精は立ちて而して力は役す。外は保して内は持す。

三三八

網緼給資して。萬物は並び出づ、

三三九

萬事は並び起る、

三四〇

起る者は斯の中に居る、

三四一

出る者は斯の中に隠る、

三四二

物は大なりと雖も、而も之が爲に保せられて立す、

三二四三

三二四四―四五

三二四六

三二四七

三二四八

三二四九

三二五〇

三二五一

三二五二

三二五三

三二五四

三二五五

三二五六

三二五七

三二五八

三二五九―六一

三二六二

三二六三

神は妙なりと雖も、而も之が爲に奉ぜられて活す、且つ
我の資る所を以て之を言わんか。夫れ意なる者は、我の神の活なり、
身なる者は、我の體の立なり、

精は其の間に隠る、

華は其の表に見る、

保持は以て我の生を保つ、

給資は以て我の生を養う、

奉運は以て我の物を成す、

網縕は以て我の後を繼ぐ、

物を保ちて其の神を奉ず、

神を運びて其の物を役す、

心は此の權を以て肢體を役す、

身は此の力を以て肢體を保つ、

國家の君を奉じ、

君上の下を役する、

善觀すれば。則ち精麁は本と一なり、

氣物は體用を爲す、

性體は性才を爲す、

三二六四

氣きの用ようはすなわてん天なり、

三二六五

物の體たいはすなわぶつ物なり、

三二六六

性せい之これに體たいする者ものはすなわ精せいなり、

三二六七

性せい之これを運うんする者ものはすなわ神しんなり、

三二六八―六九

天物精神てんぶつせいしんは。本根精英ほんこんせいえいに於おいて合がつす。故ゆえに本ほんは氣きなり、

三二七〇

根こんは物ぶつなり、

三二七一

乃すなわち天地てんちなり。天地てんちの外そと。豈あに佗た有あらんや。

三二七二

隠かくれて之これに體たいする者ものは、すなわ精せいなり、

三二七三―七四

見あらわれて此ここに出いづる者ものは、すなわ華かなり、故ゆえに見露けんろは華かに非あらざる莫なし、

三二七五

隱没いんぼつは精せいに非あらざる莫なし、

三二七六

精せいに非あらざれば則すなわち神しんは依よる所莫ところなし、

三二七七

神しんに非あらざれば則すなわち精せいは奉ほうずる所莫ところなし、

三二七八

蓋けだし夫それ。一いちなる者ものは外がい無なし、

三二七九

散さんずる者ものは外がい有あり、

三二八〇

外がい無なき者ものは自じ立りつす、

三二八一

外がい有ある者ものは立へいりつ立すす、

三二八二

自じ立りつする者ものは、自おのら能よく保營奉運ほえいほううんす、

三二八三

立へいりつ立すする者ものは、能よく相あい保營奉運ほえいほううんす、是ここを以もつて。

(PA 246)

(I 417b)

三三八四

保營奉運する者は同じく有して。而して自と相と則ち相い隔つ。

三三八五

之を火に移して之を言わんか。夫れ一点の燈火は。

三三八六

竈は以て之を保す、臺は以て之を持す、

三三八七

神は以て之を營す、膏は以て之を養す、

三三八八

其の知ること無きや、乾を擇んで之に就く、

三三八九

溼を擇んで之を避く、

三三九〇

其の運する所無きや、明を燃に運す、

三三九一

熱を燒に運す、是を以て。

三三九二―九三

近くは則ち葛裘飲食、遠くは則ち宮牆器貨、以て己を保營するを爲すなり、

三三九四―九五

近くは則ち思惟營作、遠くは則ち使令習學、以て己を奉運するを爲すなり、是を以て。

三三九六

内は保營奉運を用すれば、則ち

三三九七―九八

外も亦た保營奉運を有す、故に知は天下の故に通ず、

三三九九

力は天下の物を役す、

三三〇〇

之を天地に背ける有らば、則ち天地に業を拡め。

三三〇一

世を無窮に傳えんも。天地は奚んぞ之を拒まん。

三三〇二

給う所を知り、而も資る所を觀るに、本は猶お末の如きなり、

三三〇三

資る所を觀て、而も給う所を察すに、末は猶お本の如きなり、

三三〇四

本末は共に同じ。自相何ぞ隔てん。

三三〇五*

是を以て。象質なる者は、
發收の物なり、

三三〇六

噤喩なる者は、
發收の氣なり、

三三〇七

之を保する者は精力なり、

三三〇八

之を運する者は神靈なり、

三三〇九

靈は知り神は通ず、

三三一〇

精は奉じ力は役す、

三三一一

天象は滾滾として運轉す、

三三一二

地質は擾擾として往來す、

三三一二

運轉する者は、其の定期を知る、

三三一二

往來する者は、其の變化に通ず、

三三二五

芸芸たり、

三三二六

擾擾たり、

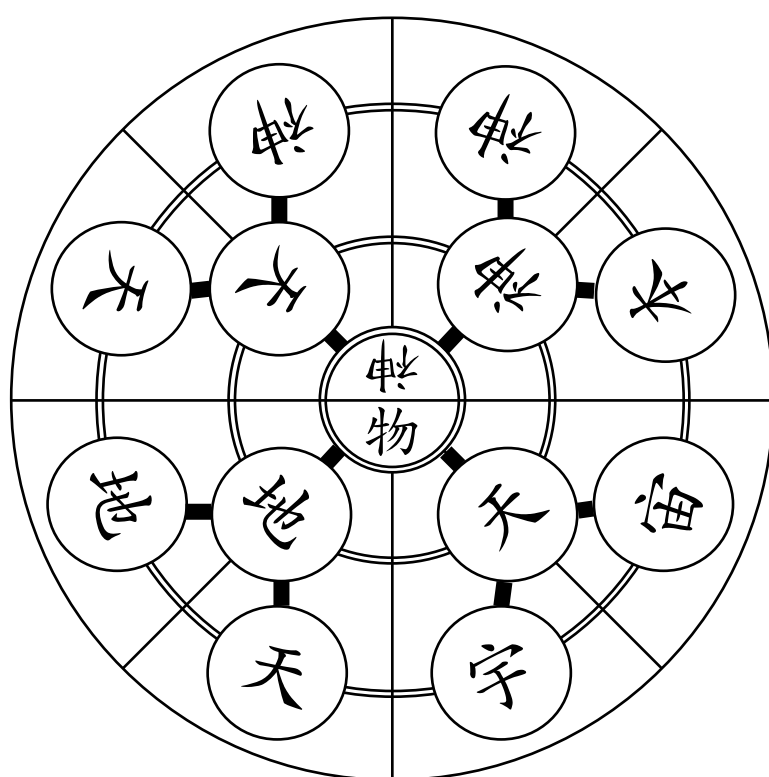
三三二七

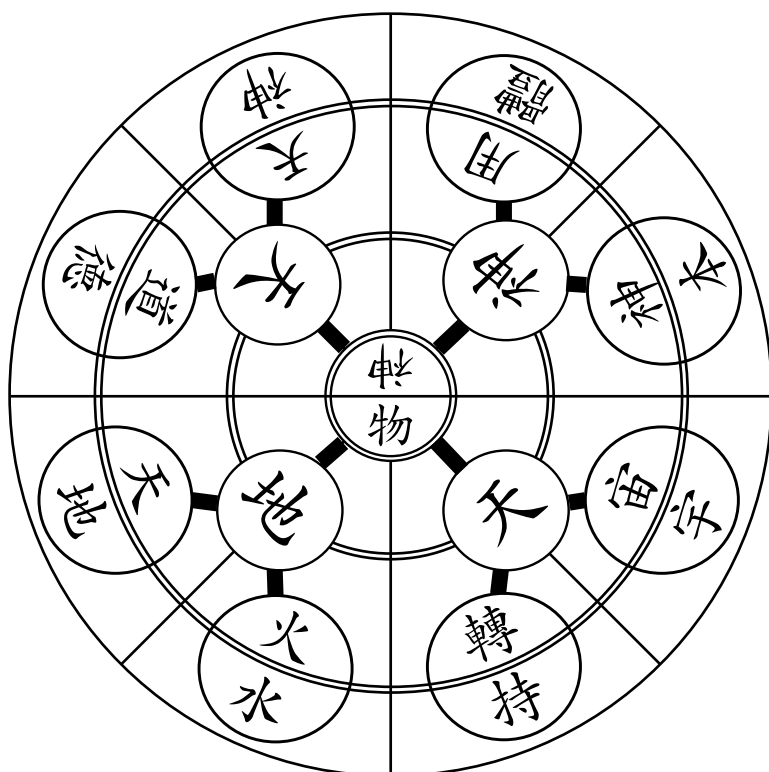
各 氣物の相い立するは。

三三二八

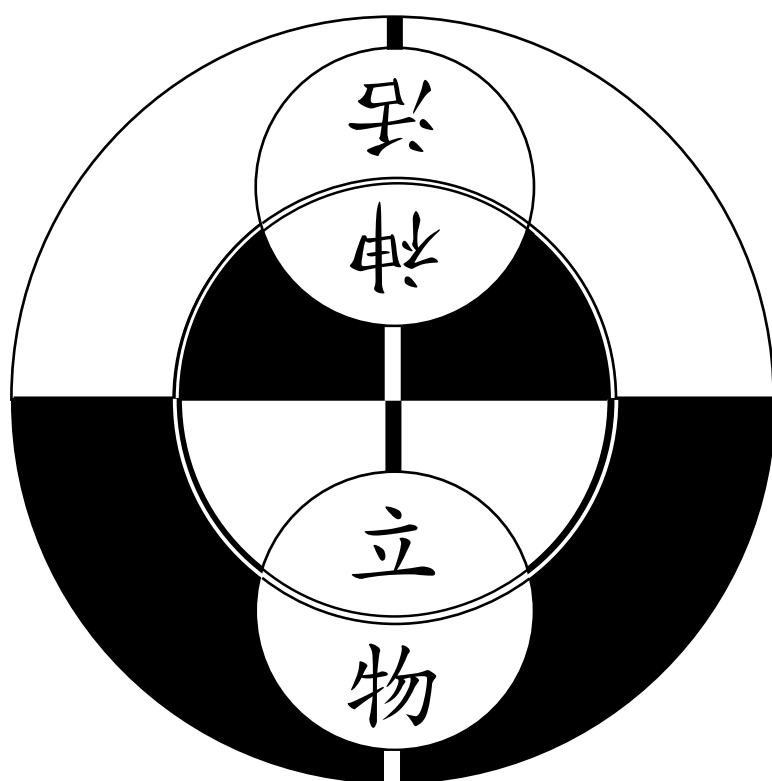
各 神靈の之を運するに非ざる莫きなり。

神物剖析圖一合

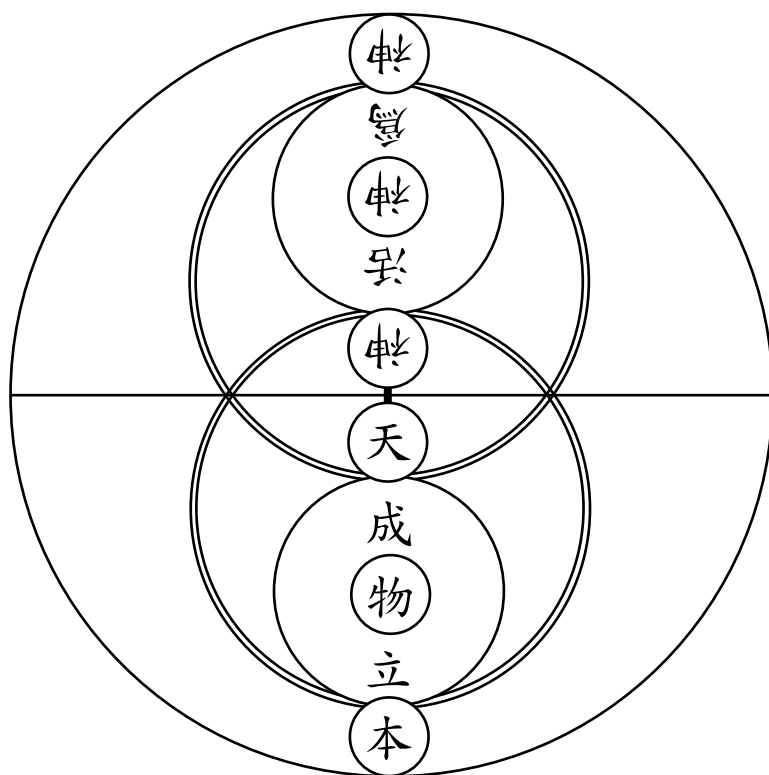


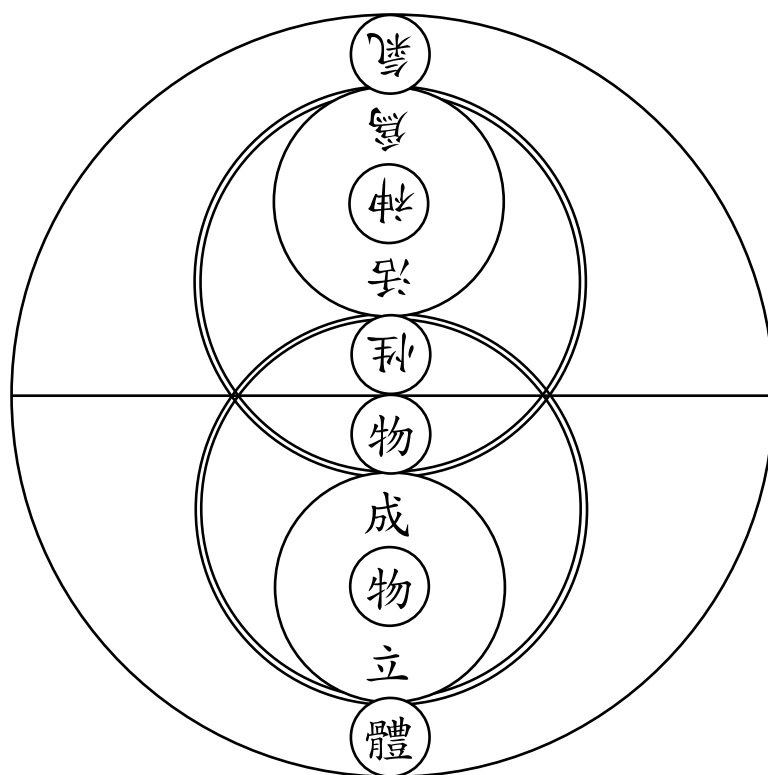


神活立物圖

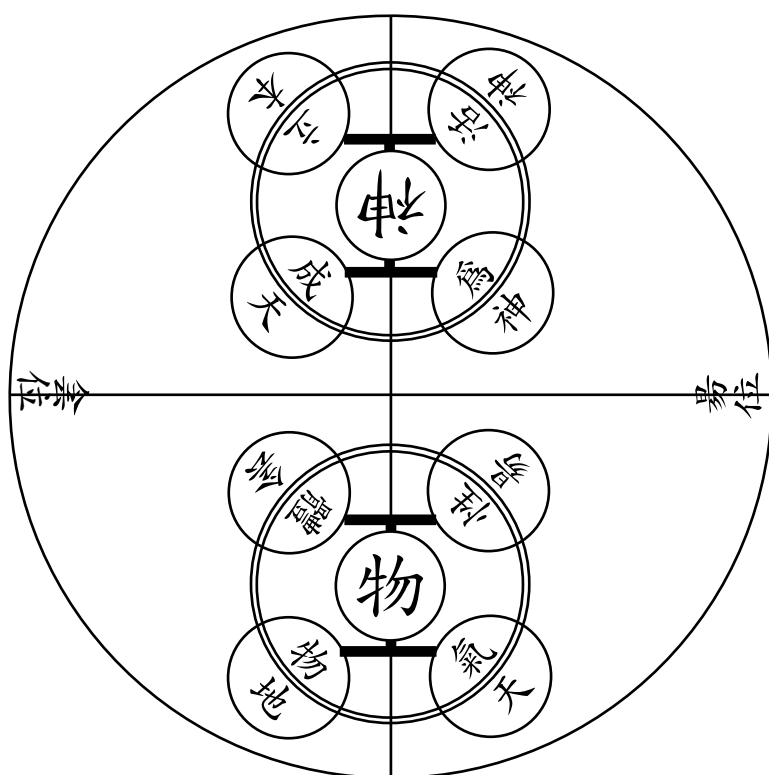


本神天神図一合

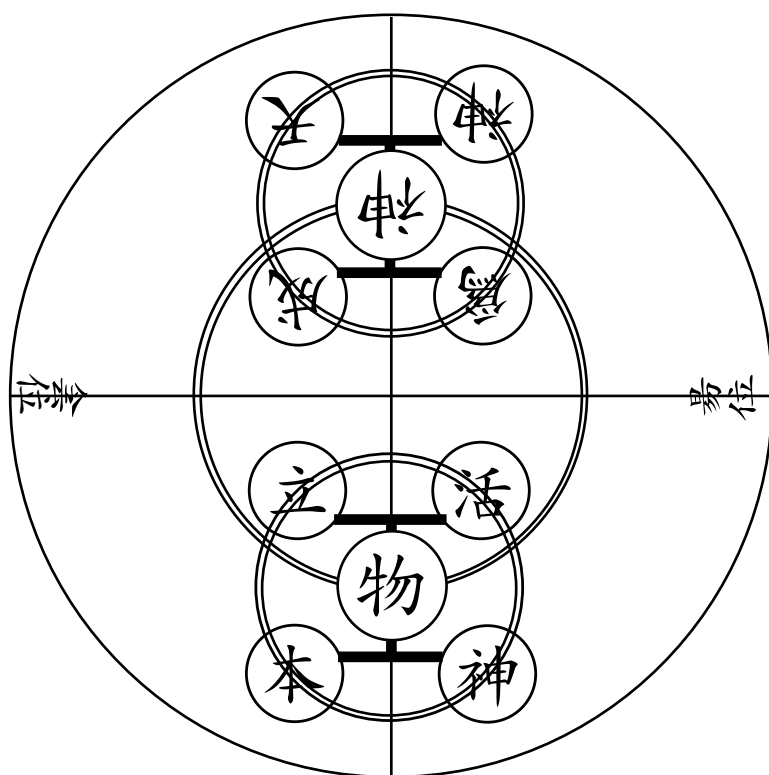


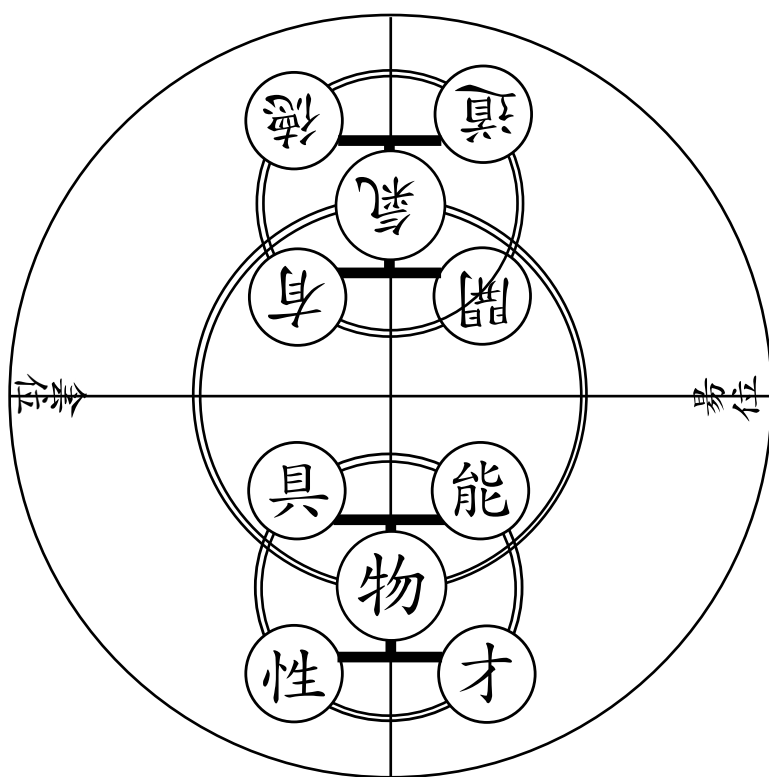


神物合圖

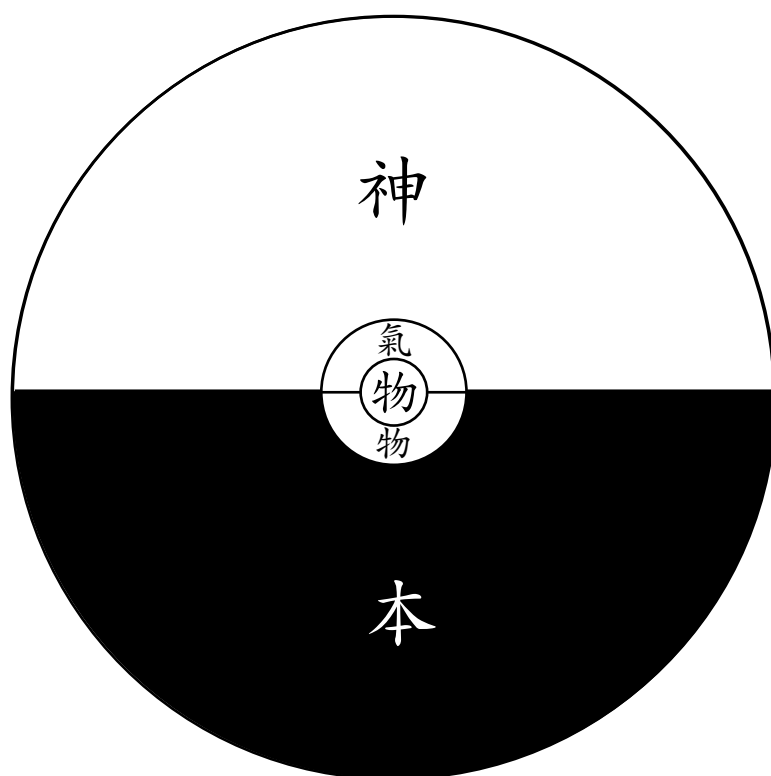


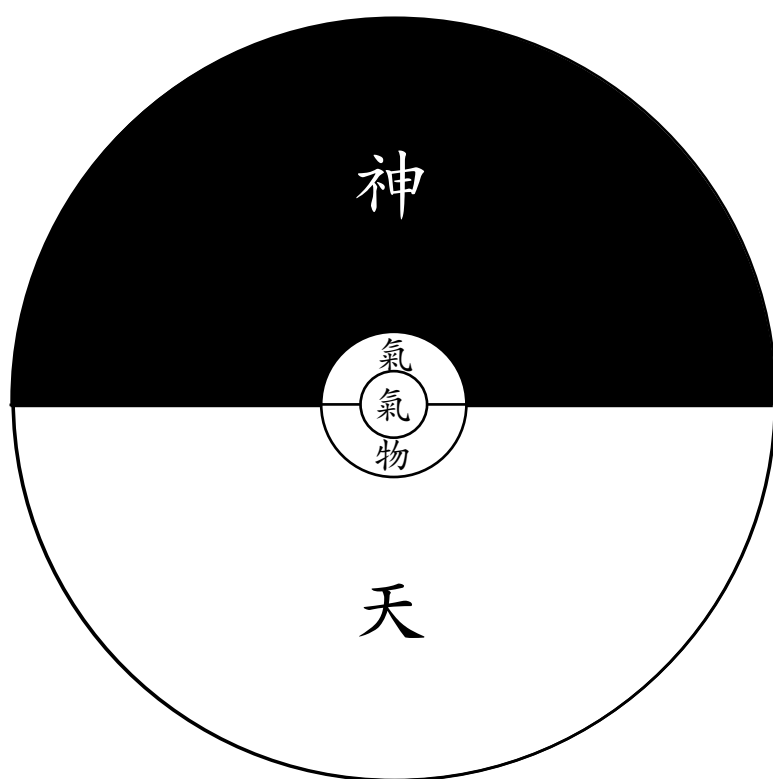
性才道德圖一合



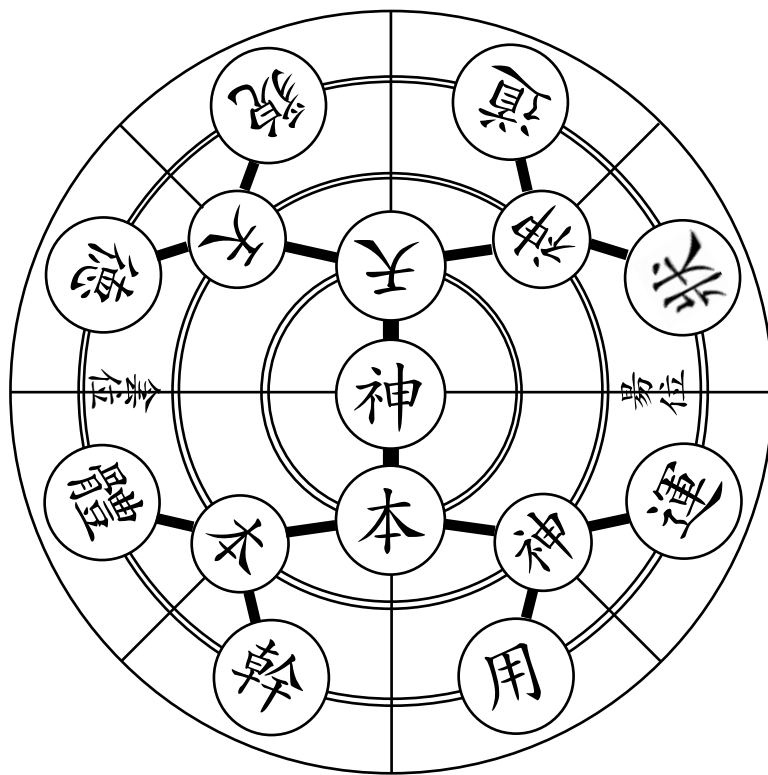


本神天神反氣物圖

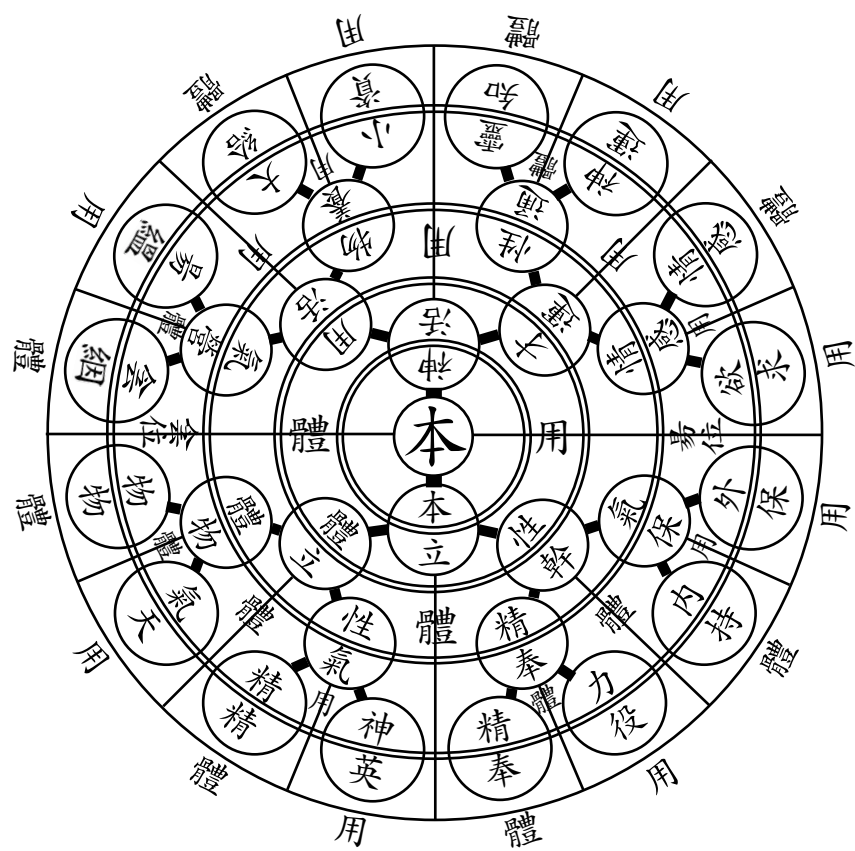


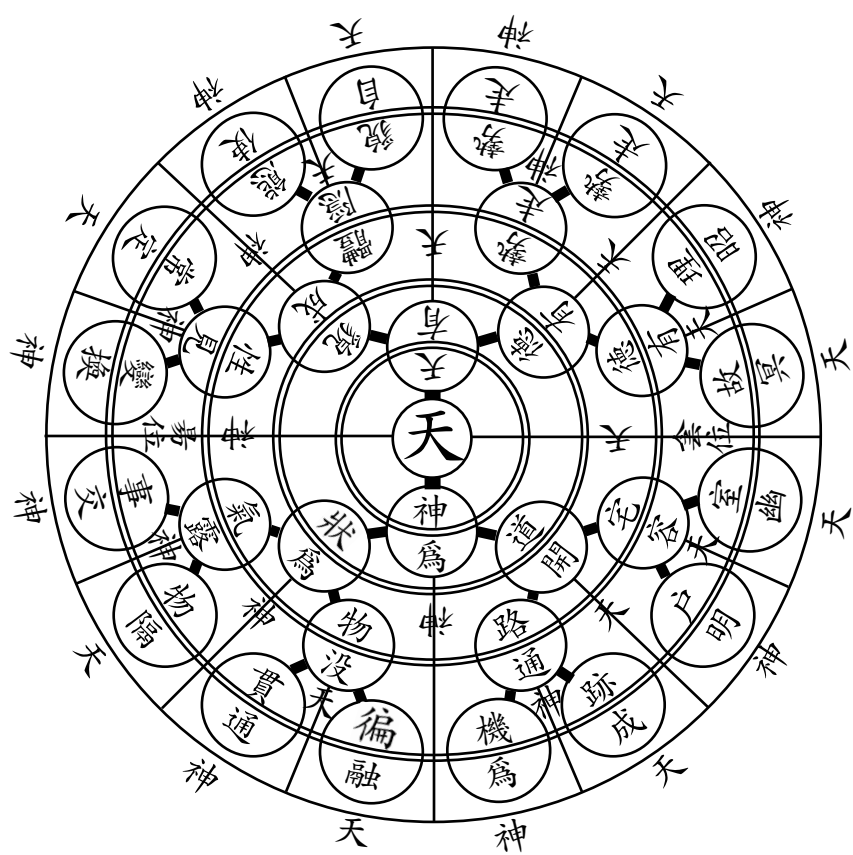


天本合圖

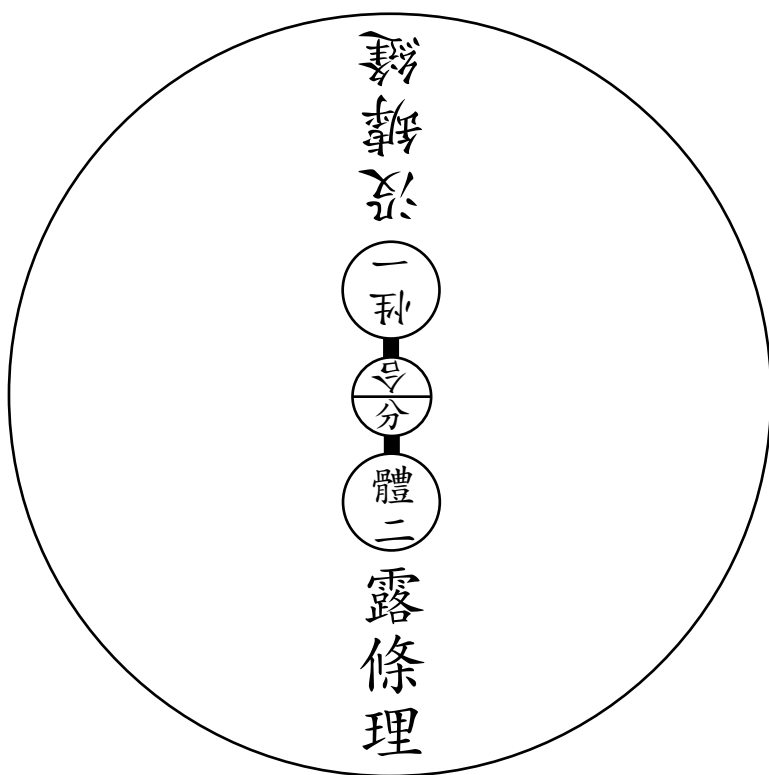


本神天神圖一合

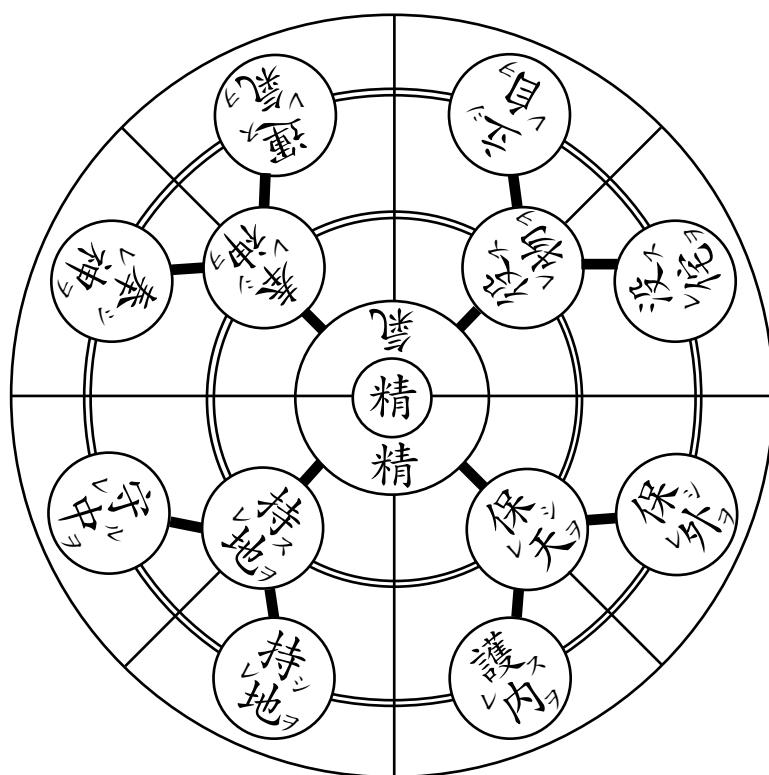




図名なし



保持奉運圖



鬼神きしん 神しん

三三二七

性は割はして而しかして體たいは二になり、

三三二八

體たいは合がして而しかして性せいは一いちなり、是こゝを以もつて。

三三二九

一能いちよく一いち、

三三三〇

一一能いちよく一いち、

三三三一

二には反はんして一いちに合がつ、

三三三二

一いちは移うつりて二に居おる、夫それ

三三三三

物ぶつは能よく神しんを奉ほうず、

三三三四

神しんは能よく物ぶつを役えきす、

三三三五

物ぶつを役えきする者ものは、活かつして運うんす、

三三三六

神しんを奉ほうずる者ものは、保ほして持じす、

三三三七

是この故ゆゑに。神しんの妙みょうは。感かん通つうに在あり。蓋けだし

三三三八

一いちは二になれば則すなわち體たいを分わかちて竝ならび立たつ、

三三三九

二には一いちなれば則すなわち性せいを反はんして一いちに歸きす、

三三四〇

若もし感かん通つうの運うん無なくんば、孰いずれか歸き一の痕こんを見あらわさん、

三三四一

若もし竝へい立りつの體たい無なくんば、孰いずれか條じょう理りの分ぶんを認みとめん、

三三四二

竝ならび立たちて體たいは相あい隔へだつ、

三三四三

相あい交まじりて性せいは相あい通つうず、

三三四四

通つうずれば則すなわち知る。

三三四五

知しれば則すなわち感かんず。

三三四六

感かんずれば則すなわち欲ほつす。

三三四七

通つうは則すなわち性せい、

三三四八―四九

感かんは則すなわち情じよう、然しかり而じこうして通つうは知ちに偶ぐうして、神しん靈れいの別べつ有あり、

三三五〇

感かんは欲よくに偶ぐうして、情じよう欲よくの分ぶん有あり、

三三五一

通つうは蔽へいを待またざる能あたわず、

三三五二

知ちは冥めいに因よらざる能あたわず、

三三五三

感かんは應おう無なきこと能あたわず、

三三五四

欲よくは惡あく無なきこと能あたわず、

三三五五

神しん靈れい情じよう欲よくは相あい得えて、而しかして其その活かつする者ものは始はじめて運うんす。夫それ

三三五六

性せいは其その一いちを全ぜんすれば、則すなわち其その才さいは一いちなること能あたわず、

三三五七

體たいは其その二にを立りつすれば、則すなわち其その才さいは一いちなること能あたわず、

三三五八

二になること能あたわざるを以もつて、物ぶつに遇あいて而しかして通つうぜざる所ところ莫なし、

三三五九

一いちなること能あたわざるを以もつて、物ぶつを剖さきて而しかして隔へだてざる所ところ莫なし、

三三六〇

通つうじて運うんす、乃すなわち神しんの活かつなり、

三三六一

隔へだてて立りつす、乃すなわち物ぶつの立りつなり、

三三六二

一いち能よく一いち、一いちは移うつりて二にに居おれば、則すなわち其その散さんずる所ところ盡とこきず、

三三六三

一と不盡と、物の立つ所は、乃ち神の活する所なり、

三三六四

一一即一、二は反して一に合せば、則ち其の合する者態を變ず、

三三六五

變態合一、異の立つ所は、乃ち一の居する所なり、故に

三三六六

自から成る者も、亦た立ちて運する有り、

三三六七

依りて成る者も、亦た立ちて運する有り、

三三六八

活立は在らざる所無しと雖も、其の態は則ち處に隨いて異なり。故に

三三六九一七〇

神は活し物は立す、宙は通じ字は塞す、

三三七一一七二

神は爲し天は成る、天は動き地は止る

三三七三

水火の發收より、

三三七四

冬夏の噓喻、

三三七五

一氣の綱縊、

三三七六

小物の生化、微妙倏忽に至りて、活立を遺さず。

*三三七七一七八

故に一の通ずる所よりして之を觀れば、則ち神運即本立、

三三七九

本立即神運なり、然り而して

三三八〇

物を立る者は精なり、能く物中に隠る、

三三八一

氣を運ぶ者は神なり、能く物表に見る、夫れ

三三八二一八三

神なる者は、爲を以て道と爲す、天なる者は、有するを以て徳と爲す、

三三八四一八五

天なる者は、成を以て道と爲す、神なる者は、活するを以て徳と爲す、故に

三三八六

天は成りて擗わず、

三三八七

神は爲して測らず、

三三八八

擗われざる者は定常の地なり、

三三八九

測られざる者は變化の氣なり、是に於てか。

三三九〇

神は物に妙なり、

三三九一

物は神に誠なり、是を以て。

三三九二

神なる者は物の主、誠を以て範を爲す、

三三九三

物なる者は神の器、活を以て立を爲す、是を以て。

三三九四

通動は本氣に活す、

三三九五

感通は神氣に活す、

三三九六

神なる者は物を没す、

三三九七

物なる者は物を露す、

三三九八

各各物を立て。氣物交接す。

三三九九

通蔽知冥は、才の巧拙なり、自立に由りて而して此の運有り、

三四〇〇

感應好惡は、情の酬酢なり、佗に交わるよりして此の運有り、蓋し

三四〇一

經は能く剖析す、

三四〇二

緯は能く對待す、

三四〇三

剖析は變化を盡す、

(PA 267)

(PA 267)

三四〇四*

對待は氣物を反す、是を以て。

三四〇五

相交通蔽するは則ち性の才なり、

三四〇六

相知冥するは則ち性の靈なり、

三四〇七

感應好惡の酬酢は。則ち情の運態なり。

三四〇八

大物は此の神靈情欲を有す、

三四〇九*

小物は意智情欲を有す、

三四一〇

物に資りて身と爲す、

三四一一

神に資りて心と爲す、

三四一二*

人の境の開く所なり。故に

三四一三

天人の性情は。其の態を反す、

三四一四

其の聲を同す、

三四一五

聲なる者は、人の作る所なり、而して

三四一六

主なる者は、天の成る所なり、

三四一七*

故に聲の同と異は。天與らず。

三四一八*

故に神靈情欲。我に於て意智情欲を爲す。

三四一九

性の一なるを以て、而して能く通じ能く知る、

三四二〇

體の隔たるを以て、而して能く蔽い能く冥し

三四二一

天地 通蔽せざれば、則ち人は蔽悟を何に於てか資らん、

三四二二

天地 知冥せざれば、則ち人は智愚を何に於てか資らん、

三四二三

感應好惡は同じく然り。

三四二四

物を異にするを以て、而して意の有無を反す、

三四二五

性を一にするを以て、而して氣の感通を同す、

三四二六

蓋し物の異は、反より異なるは莫し、

三四二七

物の一は、合より一なるは莫し、故に

三四二八

其の至つて合する者は、

三四二九

便ち至つて反する者なり、

三四三〇

體を反して能く相い隔つ、

三四三一

氣を合して能く相い通ず、是に於てか。

三四三二

隔てざるの物莫し、

三四三三

通ぜざるの才莫し、

三四三四

其の才も亦た之を謂いて神と爲す、

三四三五

蓋し神の通は、其の靈とする處を能く知る、

三四三六

通ぜざる所莫しと雖も、

三四三七

知らざる所莫しと雖も、而も體に於て剖きて見れば、則ち

三四三八

蔽を以て而して偶せざる能わず、

三四三九

冥を以て而して偶せざる能わず、一有の中、此の如く相い反す、

三四四〇*

二ならざるの體莫し、

三四四一*

一ならざるの性莫し、

三四四二*

蓋し情の感は、其の親とする處を求むる有り、

三四四三

分れざる所無きと雖も、

三四四四

反せざる所無きと雖も、而も性に於て合して見れば、則ち

三四四五

感に於て應ぜざること能わず、

三四四六

求に於て惡まざること能わず、對待の間、此の如く酬酢す、

三四四七

夫れ人は、眇たる一氣物。

三四四八

大物の給する所に資る、

三四四九

與物の依る所に立つ、

三四五〇

體は歧然を以て、彼の混淪に換う、

三四五一*

耿耿を以て、彼の鬱渟に擬す、

三四五二

天に反して而して後、以て人を得る。

三四五三

既に能く天に反す。

三四五四

是に於て天に合す。

三四五五*

故に天は無意の神靈情欲を以て給す、

三四五六

人は有意の意智情欲を以て資る

三四五七

有意を無意に於て反して、而して彼此の神物。一有の中に活立す。

三四五八

反する者 能く合すれば、則ち人は天に通ず可し、

三四五九

合する者 能く反すれば、則ち天も亦た人に冥たり、且つ

三四六〇

感應なる者は、各氣の酬酢なり。

三四六一

欲惡なる者は、感應の知辨なり。

三四六二

人に有る者を以て、天に無きと爲す者は、則ち一有の徳を知らざるなり、

三四六三

己に有る者を以て、人に同じと爲す者は、相い反すの道を知らざるなり、

三四六四

夫れ二は反して一に合す。合すれば則ち相い通ず。

三四六五

之を小物に移して之を言わんか。

三四六六

水を以て炭に灌ぐに、炭は能く水を喩う、

三四六七

火を以て水を煮るに、水は能く火を喩う、

三四六八

其の相い喩うや。相い入るなり。

三四六九

其の相い入るや。反の合する所なり。

三四七〇

反して隔たる者は、通じて知る。

三四七一

通は則ち二の一なり、

三四七二

知は則ち活の靈なり、

三四七三

夫れ物の散じて各を爲す。其の氣も亦た各なり。

三四七四

氣物は各おの別れて、而して感通は相い異なる。故に

三四七五

火の通る所にして水塞がる、

三四七六

水の好む所にして火惡む、

三四七七

物の知る所にして而して我冥し、

三四七八

我の知る所にして而して物冥し、故に

三四七九

磁は南を知るに靈なり、

三四八〇

火は高きを知るに靈なり、

三四八一

狗は鼻を用いるに巧なり、

三四八二

人は舌を鼓するに巧なり、

三四八三

通ずれば則ち知る。

三四八四

知れば則ち感ず。

三四八五

感ずれば則ち親す。故に

三四八六

能く其の反を通じて合すれば、則ち柄を鑿中に置くが若し、

三四八七

其の同を執りて合すれば、則ち柄を柄中に置くが若し、

三四八八

神にして而して物に向う。其の才は感通す。是を以て

三四八九

天地は並び判れ。

三四九〇

運轉は升降す。

三四九一

天日東西して、而して地は跡を晝夜に成す、

三四九二

天日南北して、而して地は跡を冬夏に成す、

三四九三

日感して而して燥物は應ず、

三四九四

月げつ 感かんして而しかして水物すいぶつは應おうず

三四九五

動どうは晝夜ちゅうやに作さく輟てつす

三四九六

植しょくは冬夏とうかに榮枯えいこす

三四九七

知通ちつうは性せいなり

三四九八

感求かんきゅうは情じょうなり

三四九九

感通かんつうは本もと一いちなり

三五〇〇

天地てんちは反合はんごうす

三五〇一

是ここを以もつて。天地てんちは、則すなわち鬼神きしんの能のうを伸のぶるの地ちなり、

三五〇二

鬼神きしんは、則すなわち天地てんちの活かつを致いたすの物ものなり、蓋けだし對たいに偶與ぐうよ有あり。

*三五〇三

以もつて親疏しんそを分わかつ。是ここに於おいて。知通ちつう感求かんきゅう。物ぶつに随したがいて態たいを變へんず。

三五〇四

夫それ人じんなる者ものは。一いちなり。男おとこを分わかち女おんなを分わかつ。

三五〇五

男女だんじょ綱縊いんぐんより。兄弟けいてい姉妹しまい。父祖ふそ子孫しそん。

三五〇六

姻婭いんあ妯娌てきりの疏そを結むすぶ

三五〇七

叔姪しゆくて姑姪こてつの親しんを遠とおざく

三五〇八―〇九

其その變へんは盡つきず。天地てんちの給きゅうする所ところは。我われ資とる有ありて然しかり。蓋けだし

三五一〇

性せいは一いちにして其その二にを具ぐす

三五一一

體たいは二ににして其その一いちを成せいす。故ゆえに

三五一二

一漸いちすみて一いちを開ひらく。而しかして

三五一三

一移りて一一に居れば。則ち

三五一四

綱は目を繋ぐ、

三五一五

目は綱を成す。故に

三五一六

二は反して一に合すれば、則ち真の偶なる者は、之を親と爲す、

三五一七

綱縊給資は、以て能く合する有り、

三五一八

布散して傍らより望めば、則ち偶の與なる者は、之を疏と爲す、

三五一九

感應酬酢は、以て能く相い依る。是の故に

三五二〇

反偶は則ち綱縊し、以て造化を成す、以て天地と經緯を爲す、

三五二一

與偶は則ち感應し、以て變化を盡す、以て佗偶と參差を爲す、是を以て。

三五二二

反偶は則ち氣物反す、

三五二三

與偶は則ち性類傍す。夫れ

三五二四

各物は各の性體す。

三五二五

各才は相い交接す。

三五二六

反と與と同じく隔つと雖も。條理に別有り。親疏の道を異にす。

三五二七

鬼神は佗無しと雖も。而も感應參差す。夫れ

三五二八

體なる者は、氣の幹なり、乃ち物の立する所なり、

三五二九

性なる者は、物の神なり、乃ち體の活する所なり、

三五三〇

幹立は神に應ずるの地を爲す、乃ち體物の天なり、

三五三一

神活は物に感ずるの氣を爲す、乃ち運物の神なり、

三五三二

神なる者は、變幻出沒、靈にして妙なり、

三五三三

物なる者は、凝立定常、靈ならず妙ならず、蓋し

三五三四

天は有せざる所莫し、有せざる所莫ければ、則ち隔と雖も而も能く融す、

三五三五

神は貫せざる所莫し、貫せざる所莫ければ、則ち疏と雖も而も能く通ず、

三五三六

鬼ならざれば、則ち神を活する所莫し、

三五三七

神ならざれば、則ち鬼を起こす所莫し、

三五三八

且つ夫れ同じく一鬱淳なり。或いは物に對し。

三五三九

或いは天に對し。本に偶し鬼に偶するは。何ぞや。

三五四〇

猶お一縣の長。民も亦た之を長と謂い。其の佐も亦た之を長と謂うがごとし。

三五四一

其の物に對する者は、天神を具して、而して變常を有す、

三五四二

鬼に對する者は、定息を鬼にして、而して變化に神す、

三五四三

物は各各を成す。而して活も亦た各各なり。

三五四四

活する者は。自から活するなり。

三五四五

通ずる者は。己の通を佗に達するなり。故に

三五四六

天は活して地を保す、

三五四七

地は活して天を奉ず、

三五四八

日は活して物を煦む、

(I 420a)

(PA 272)

三五四九

影は活えい かつして物ぶつを肅しゆくす

三五五〇

擾じよう擾じよう紛ふん紛ふん。往ゆくとして活かつの運うんに非あらざる莫なし。是こゝを以もつて。

三五五一

自おのずから活かつする者ものは、活かつして運うんす

三五五二

佗たに通つうずる者ものは、感かんじて通つうず

三五五三

彼此ひしは自おのずから活かつ運うんすれば、則すなわち

三五五四

天てんの運うんする所ところ、地ちは能よくせず、

三五五五

地ちの運うんする所ところ、天てんは能よくせず、

三五五六

一一いちいちは相あい感かん應おうすれば、則すなわち

三五五七

易ようは能よく會いんに感かんず、

三五五八

會いんは能よく易ように通つうず、

三五五九

蓋けだし條理じようりの態たいは。此これに予あたうれば則すなわち彼かれに奪うばう、

三五六〇

一いちに能のうなれば則すなわち一いちに拙せつなり、是こゝを以もつて。

三五六一

物ぶつなる者ものは緯露いろう、物ぶつに止とどまり、氣きに動うごく、

三五六二

神しんなる者ものは經通けいつう、力りきに支ささえて、勢せいに走はしる

三五六三

支ささえて鬼き應おうず、

三五六四

走はしりて神しん感かんず、

三五六五

勢せい力りきは乃すなわち鬼神きしんの車馬しゃばなり。

三五六六

物ぶつに露ろすれば則すなわち動うごく、

三五六七*

神に見るれば則ち變ず、是を以て。

三五六八

精麁は態を異にするも。其の機は佗無し。是を以て。

三五六九

天は其の精を痕す、

三五七〇*

地は其の情を見ず、故に

三五七一

感應の常は、天感地應なり、

三五七二

感應の變は、一向一背なり、

三五七三

常なる者は跡を没す、天なり、

三五七四

變なる者は跡を露す、地なり、

三五七五―七六

精麁に由りて。隱見然らしむ。是を以て。

三五七七

轉の西線に依り、象の東線に依る、一轉一運、整齋は毫厘を差えず、

三五七八

地物は之に應じて、晝夜を爲し、冬夏を爲す、

三五七九

地の倏忽は風を生じ、驀地は火を出し、一出一没、參差其の處を知らず、

三五八〇*

萬物は是に於いて、相相生化し、相い戕賊す、是を以て。

三五八一

天は地の變化に異なるなり、

三五八二

地は天の定常に異なるなり、是を以て。

三五八三*

天は定常に支えて、而して運轉に走る、

三五八四

地は持守に支えて、而して變化に走る、

三五八五*

故に鬼神の跡は。萬物に於て熾んに。人に於て甚しと爲す。

三五八六

三五八七

三五八八

三五八九

三五九〇

三五九一

三五九二

三五九三

三五九四

三五九五

三五九六

三五九七

三五九八

三五九九

三六〇〇

三六〇一

三六〇二

三六〇三

小にして喜怒愛憎。

大にして予奪奉棄。

鬼神の事をうるに非ざる莫きなり。

天事は曆なり。諸を前後に推して。而して數を知る者は其の彷彿を獲る。

地事は史なり。倏忽の間。地は震え天は鳴る。

(追記により削除)

風は起り霆は撃ち。

炎熱は熱くが若くにして。而して雹は其の中に結ぶ。

沍寒は冽くが若くにして。而して雷は其の間に解く。

衝いて轉の 際に至り。彗孛諸象は妖を爲す。

而して小物の變化に至りては。則ち愈いよ益ます百出す。

氣は體を以て居る、

體は氣を以て立つ、

天は神を以て成る、

神は天を以て爲す、故に

天は天地を以て體と爲す、

天神を以て用と爲す、

天道は動きて復す、動けば則ち變ず、

復すれば則ち定まる、

(PA 274)

(I 420b)

三六〇四

地道は靜して往く、靜すれば則ち持す、往けば則ち易わる、是の故に。

三六〇五

天に在る者は、變を以てして定まる、

三六〇六

地に在る者は、持を以てして易わる、

三六〇七

定まれば則ち常なり、

三六〇八

易われば則ち變なり、

三六〇九

易わりて變なる者は、爲なり、

三六一〇

定まりて常なる者は、成なり、

三六一一

天は東西に往來すと雖も、動きて變ずるの機は素より定る、

三六一二

地は内外に上下すと雖も、靜にして持するの機は紛擾す、

三六一三

體は充たざる所莫ければ、則ち聚散せざる者莫し、

三六一四

氣は通ぜざる所莫ければ、則ち生化せざる者莫し、而して

三六一五

天に在る者は、緯中に聚散して、而して其の體を常にす、

三六一六

地に在る者は、經中に解結して、而して其の體を換える、故に

三六一七

天に在る者は、生化の跡を没す、

三六一八

地に在る者は、生化の體を換う、蓋し

三六一九

感應なる者は、變化紛若の爲なり、

三六二〇

知運なる者は、素定整齋の事なり、是の故に。

三六二一

天は則ち其の道や定る、其の運や常なり、感應の道は微なり、是を以て。

整齋は以て常を成す、
錯雜は以て變を爲す、

三六二二
三六二三
三六二四
三六二五
三六二六
三六二七
三六二八
三六二九
三六三〇
三六三一
三六三二
三六三三
三六三四
三六三五
三六三六
三六三七
三六三八
三六三九

地は則ち其の爲や變ず、其の交や各なり、其の各なる者は以て感ず、
其の變なる者は以て應ず、是を以て。知運の用は定まらず、
定まらざる者は、才、感應に露す、
定まる者は、徳、知運に具す、是を以て。
天に在るの感應は、知運と相に伴う、
地に在るの知運は、感應と相い用す、然りと雖も。
其の感應を分てば。則ち榮枯の春秋を期す、

潮汐の朔望を期す、
悲歎の吉凶を期す、
情欲の男女を期すが如きは、感應の常なり、

雲雨風雷の機、
生化聚散の發、
喜怒愛憎の意、
酬酢黜陟の爲は、

感應の變なり、

是の故に。苗は水土を得て茂る、

人は芻豢を食して肥ゆ、

牡は牝に感じて子應ず、

種は土に感じて苗應ず、

三六四〇

水は火に感じて其の質 盡く、

三六四一

物は水を畜えて其の體 壞る

三六四二

其の跡は反すと雖も。亦た同じく一感應なり。故に

三六四三

柔は剛に勝れば、則ち錫は汞に和して融し、鐵は鹽を見て壞る、

三六四四

小は大を制せば、則ち蛞蝓は蛇を伏し、短狐は人を射つ、

三六四五

氣氣は錯雜し。其の用は無窮なり。是を以て。

三六四六

戛撃は聲を異す、

三六四七

榮枯は彩を轉ず、

三六四八

香臭相に移る、

三六四九

苦甘相に轉ず、故に

* 三六五〇

鐘鼓は含晴を以つて清濁を同じくせず、

* 三六五一

諸肉は鮮腐に由りて毎に腥臭を殊にす、

* 三六五二―五三

(編集による空白)

三六五四

呉藍は未だ紅ならず、醋は未だ紅ならず、呉藍は醋を得て、紅は其の中に成る、

三六五五

麴は未だ酸ならず、米は未だ酸ならず、米麴は相い得て、酸は其の中に成る、

三六五六―五七

知らず其の孰れか之を有し、孰れか之を與うるを、唯だ感應は此の如くならしむ、

三六五八

感應は此の如くならざらしむ、

三六五九

空甕は聲無し、耳を掩うれば則ち澎湃 聲を起こす、

三六六〇

三六六一

三六六二

三六六三

三六六四

三六六五

三六六六

三六六七

三六六八

三六六九

三六七〇

三六七一

三六七二

三六七三

三六七四

三六七五

三六七六

三六七七

朝露は色無し、日に映ずれば則ち金碧彩を殊にす、
臭穢。人は則ち嘔吐を催す、

狗鳥は則ち之を嗜む

嗜苦の人は、甘に勝らず、

嗜甘の人は、苦に勝らず、

同一の彩聲臭味は。交接相い轉ずれば。則ち感應自から別なり。是の故に

老幼は嗜を同じくせず、

病健は味を異にす、

水は溺る可きが如くにして、而して水族は水を常にす、

氣は餒えを愈さずして、而して蟄蟲は氣を含む

鳧雁は暖を以て去る、

昆蟲は寒を以て蟄す、

蛇は無足にして行く、

蟣は無翼にして飛ぶ、

狐は則ち人を魅す、而して人の畜う所の狗に啖わる、

人は則ち鷺を食す、而して鷺の食う所の蜮に中てらる、

動は、偶せざれば則ち成らず、

植は、偶する無くして種す、

三六七八
三六七九
三六八〇
三六八一
三六八二
三六八三
三六八四
三六八五
三六八六
三六八七
三六八八
三六八九
* 三六九〇
三六九一
三六九二
三六九三
三六九四
三六九五

不定^{ふてい}は則^{すなわ}ち神^{しん}の爲^なす所^{ところ}なり、
不變^{ふへん}は則^{すなわ}ち天^{てん}の成^なる所^{ところ}なり、
不定^{ふてい}感應^{かんおん}を知^しりて、各^{かく}氣^きの本^もと相^あい通^{つう}ずるを知^しる、
各^{かく}氣^きの相^あい通^{つう}ずるを知^しりて、不定^{ふてい}の定^{さだ}まる所^{ところ}を知^しる、
晝^{ちゅう}夜^やなる者^{もの}は、日^{にち}影^{えい}の色^{しき}より成^なる、
寒^{かん}暑^{しよ}なる者^{もの}は、日^{にち}影^{えい}の氣^きより成^なる、
有^う意^い無^む意^いは。其^その色^{しき}氣^きに從^{したが}いて。
而^{しか}して動^{どう}息^{そく}は肅^{しゆく}舒^{しよ}す。物^{ぶつ}は聲^{せい}彩^{さい}臭^{しゅう}味^みを畜^{たくわ}う。而^{しか}して
無^む意^いなる者^{もの}は、通^{つう}じて其^その竅^{きやう}を開^{ひら}かず、
有^う意^いなる者^{もの}は、通^{つう}じて各^{かく}其^その竅^{きやう}を開^{ひら}く、
意^いを用^{もち}いざる者^{もの}は、竅^{きやう}を以^{もつ}て通^{つう}ずるを用^{もち}いず、
意^いを用^{もち}いる者^{もの}は、竅^{きやう}を以^{もつ}て通^{つう}ぜざるを得^えざるなり、
而^{しか}して後^{のち}、營^{えい}養^{よう}行^{こう}居^{きよ}には。求^{きゆう}と去^{きよ}と有^ありて。而^{しか}して態^{たい}を親^{しん}疏^そ好^{こう}惡^おに爲^なす。
日^{にち}は、東^{ひがし}する者^{もの}を求^{もと}めて運^{うん}して、其^その西^{にし}する者^{もの}を厭^{いと}いて去^さる、
水^{みづ}は、卑^{ひく}き者^{もの}を求^{もと}めて流^{なが}れて、其^その高^{たか}き者^{もの}を厭^{いと}いて去^さる、
磁^じは南^{みなみ}を求^{もと}めて指^さす、
人^{ひと}は安^{やす}きを求^{もと}めて就^つく、
夫^それ天^{てん}なる者^{もの}は、清^{せい}を爲^なす者^{もの}なり、

三六九六

地なる者は、濁を爲す者なり、

三六九七

清中は廻ち定常の府なり、

三六九八

濁中は廻ち變化の藪なり、

三六九九

濁中は則ち風恬山海、天地を爲す。

三七〇〇

而して氣は彩聲臭味を醸す。動植は其の間に並び立つ。而して

三七〇一

其の形を塊岐にす、

三七〇二

其の氣を神本にす、

三七〇三

居を水陸に分ち。類を以て各おの分處す。

三七〇四

氣を天に用す、

三七〇五

質を地に持す、

三七〇六

經通に相い繼ぐ、

三七〇七

緯塞に相い竝ぶ、

三七〇八

竟に己、意を有して。人の境を開く。

三七〇九

體は配嗣器地に接す、

三七一〇

氣は彩聲臭味に交る

三七一一

其の爲作を運爲して。感物の最を爲す。其の感應する所は。

三七一二

順は以て之を得る、

三七一三

逆は以て之を失う、

三七一四

向えむかば則すなわち之これに會かいす、

三七一五

背そむけば則すなわち之これに違たがう、

三七一六

向むかう者ものは、耳じ目もくの律呂りつろ黒白こくはくに於おいてし、

三七一七

鼻舌びぜつの香臭かうしゅう甜苦かんくに於おいてするが如ごとし、

三七一八

背そむく者ものは、耳じ目もくの香臭かうしゅう甜苦かんくに於おいてし、

三七一九

鼻舌びぜつの律呂りつろ黒白こくはくに於おいてするが如ごとし、

三七二〇

或あるいは向むかい或あるいは背そむく。往ゆくとして感かん應おうせざる無なきなり。故ゆえに

三七二一

向むかえば則すなわち接せつす、雷いかづちは耳ちみみを驚おどろかす、

三七二二

熱ねつは汗あせを發はつす、

三七二三

磁じは鐵てつを引ひく、

三七二四

琥珀こはくは芥あくたを噲すう、

三七二五

背そむけば則すなわち接せつせず、雷いかづちは聾ろう者しやを怖おそれしめず、

三七二六

熱ねつは店せん人じんを煦あためず、

三七二七

磁じは芥あくたを引ひかず、

三七二八

琥珀こはくは鐵てつを引ひかず、

三七二九

彼此ひし互たがいに向かう背はいす。錯綜さくそうは章しやうと成なる。

三七三〇

以もつて天地てんちの用ようを爲なす所ところなり。何なんとなれば。

三七三一

其その呼よばざれば則すなわち應おうぜず、惡にくめば則すなわち親したしまざる所ところの者ものは、

(引に噲と訂正傍記。)

三七三二

乃ち呼べば則ち之に應じ、

愛せば則ち之に親しむ所の者なり、

三七三三

艸木は日を逐いて傾く、

三七三四

潮汐は月に随いて起る、

三七三五

鱗介は陸に死す、

三七三六

羽毛は水に困しむ、

三七三七

禾黍は霜に枯る、

三七三八

牟麦は暑に熟す、

三七三九

魚は先に感ずるを以て、而して雨前に唼す、

三七四〇

雉は後に應ずるを以て、而して震後に雊す、

三七四一

結の未だ應ぜざるや、雲霧は空散す、

三七四二

達の未だ感ぜざるや、萌芽は徒らに屯す、

三七四三

喜は色に引く、

三七四四

怒は怨に發す、

三七四五

此に疏なれば、則ち彼に親し、

三七四六―四七

此に向かえば、則ち彼に背く、其の向う者は、合に感ずるなり、

三七四八

背く者は、分に感ずるなり、

三七四九

惟だ其の道を爲すこと遽然たり。

三七五〇

今、其の遽然たる者を指して、之を無に委せば、則ち可ならんや。故に

三七五一

意の通るや、或いは天涯の情實を夢寐に傳う、

三七五二

氣の癡むや、或いは偶人の靈威を祭禱に致す、

三七五三

鬼は忽爾として來る、

三七五四

神は隱然として現る、

三七五五

災は肅乎として消ゆ、

三七五六

魅は悚然として走る、

三七五七

精は以て引く、

三七五八

誠は以て感ず、

三七五九

未だ盡く誣いる可からず。是を以て。

三七六〇

冤憤の鬱して未だ伸びず、

三七六一

忿怒の動きて未だ散ぜざるが如し、

三七六二

魑魅は氣を使う、

三七六三

厲鬼は毒を含む、

三七六四

事の非常に出づる者は。未だ怪しむに足りず。惟だ

三七六五

好んで之を常にする者は。誕なり、

三七六六

思つて之を無とする者は。徧なり、

三七六七

既に其の姦を照せば。老精邪鬼も。枝を伸ばす能わす、

三七六八

方に其の惑を抱けば。枯木朽株も。能く其の怪を爲す、

三七六九*

是の故に。地は則ち鬼神の。用を伸ぶるの地なり。

三七七〇

地上の萬物は。乃ち感應の物なり。

三七七一

人は其の境を開けば。意爲は萬物に當る。

三七七二

終に之を以て己の有と爲す、

三七七三

終に之を以て己の用と爲す、是を以て。

三七七四

己を以て人を統べ。感應を以て勢力を操る。

三七七五

萬里を控擧す、

三七七六

大衆を鼓舞す、

三七七七

隣と比べて戒嚴を分かつ、

三七七八

國を隔てて絃歌を同くす、

三七七九

智を以て天地に通ず、

三七八〇

感を以て萬物を役す、

三七八一

德行は奉戴を致す、

三七八二

術智は人情を御す、然りと雖も。

三七八三

物の通ずる所、我は却つて此に塞がる、

三七八四

物の能なる所、我は却つて此に拙なり、故に

三七八五

我は天の不能とする所を能とし、天は我の不能とする所を能とし、

三七八六

我は物の不通とする所を通とし、物は我の不通とする所を通とすれば、則ち

三七八七*
 三七八八
 三七八九
 三七九〇
 三七九一
 三七九二
 三七九三
 三七九四
 三七九五
 三七九六
 三七九七
 三七九八
 三七九九*
 三八〇〇
 三八〇一
 三八〇二
 三八〇三
 三八〇四

己おのれを以もつて物ぶつを瞞だまし、
 人ひとを以もつて天てんに争あらそう、癡おろかなるかな人ひと。

陸産りくさんは冬夏とうかを以もつて日にちに應おうず、

海水かいすいは潮汐ちようせきを以もつて月げつに應おうず、

萬物ばんぶつは其その間かんに擾擾じようじようとして。體たいを隔へだち氣きを通つうじ。相あい隔へだて相あい交まわる。

體たいは會かい違いを爲なす、

氣きは感かん應おうを爲なす、

鳥飛とりとび獸走けものはしり、苗生なえしじ子結むすぶは、則すなわち其その各自かくじに相あい動うごくなり、

雄唱ゆうとなえ雌和しわし、人灌ひとそそぎ穀登こくのぼるは、則すなわち其その各自かくじに相あい感かんずるなり、

各物かくぶつは各おのの性體せいたいす。各才かくさいは相あい發接はつせつす。

金石きんせきは火かを生しょうず、

米麴まいきくは酒しゆを釀かもす、

寄生きせいは蜷になを得えて生いく、

鴨かもは鷄けいを得えて伏ふす、

神しんは爲なす、

天てんは成なる、

爲なす者ものは貫かんす、

成なる者ものは統すぶ、

三八〇五―〇六

故に人造を以て之を言うに。抑を此に爲せば、則ち揚は彼に成る、故に

三八〇七

益を此に爲せば、則ち損は彼に成る

*三八〇八 呼べば則ち應ずるを

順感應と爲す

(PA 280)

*三八〇九 呼ばざれば則ち應ぜざるを背感應と爲す

三八一〇 或いは呼びて應ぜず

三八一一 或いは呼ばずして應ず

三八一二 其の變や。感應と會違す。共に氣物の往來なり。

三八一三 往來當遇して。而して事は天命に成る。

*三八一四 神爲は之を使む

三八一五 天成は之を自からにす

三八一六 自なるか

三八一七 使なるか

三八一八 能く昭し能く冥くす。

三八一九 奚を以てか此の若く昭昭たる、二 條理を有す、

三八二〇 奚を以てか此の如く冥冥たる、一 罅縫を没す

三八二一 昭昭は 理なり

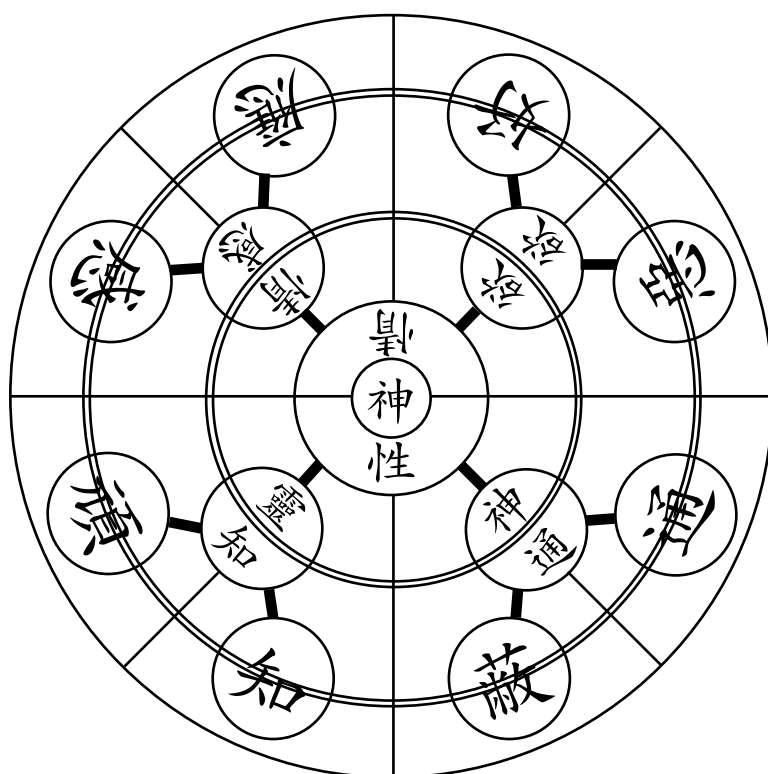
三八二二 冥冥は 故なり

*三八二三 惟だ其れ然るなり。是を以て其れ然るなり。是の故に。

三八二四
三八二五

神徳しんとくは活通かつつうなり、
天徳てんとくは幽邃ゆうすいなり、

體用性才圖



體用 體

三八三〇

精天麁地は、混成の大物なり、

三八三一

一會一易は、混成の一氣なり、

三八三二

一なれば則ち大に贏らず、

三八三三

大なれば則ち一に遺す莫し、

三八三四

一は能く二を剖きて、一統一散す、

三八三五

一は能く一に對して、一分一合す、

三八三六

人は擾擾の中に居りて。將に其の各立の纍纍を用いんとす。

三八三七

是に於て。計紀の法有り。

三八三八

計する者は、曲にして之を序す、

三八三九

紀する者は、輯にして之を統ぶ、

三八四〇

曲にして序する者は、一より十に至て、

三八四一

輯にして統ぶる者は、十百千萬にして、

三八四二

計して進む、之を乗と謂う、

三八四三

計して退く、之を除と謂う、

三八四四

乗ずれば則ち倍蓰什佰なり、

三八四五

除すれば則ち毫厘秒忽なり、

三八四六

長短は則ち之を度る。多少は則ち之を量る。

而して奇偶代りて位す、
細巨漸みて積む、

(而してを欠くか。)

三八四七

輕重は則ち之を衡る。久近は則ち之を曆る。

三八四八

皆な計の事なり。蓋し

三八四九―五〇

天數なる者は、一統二散なり、
統ぶれば則ち遺さず、

三八五一

散ずれば則ち盡さず、

三八五二

盡さず遺さず、以て其の天を觀る、

三八五三―五四

人數なる者は、一奇二偶なり、
奇は則ち自立せず、

三八五五

偶は則ち待つ所有り、

三八五六

立せずして待ち、以て其の人を觀る、是を以て。

三八五七

乗ずれば則ち進むと雖も、而も遺さざるを窮る能わず、

三八五八

除すれば則ち退くと雖も、而も盡さざるを破る能わず、

三八五九

一を以て二と爲す、故に大物は没露して、而して天地を分つ、

三八六〇

一一は相い合す、故に一氣は綢繆して、而して會易を見す、

三八六一

天地會易なる者は、其の成具なり、

*三八六二

氣物體性なる者は、其の爲具なり、

三八六三

體は物を天地に託す、

三八六四

性は態を分合に爲す、

*三八六五

是を以て。性は體を具す、

(I 423a)

(PA 285)

三八六六*

體は性を用す、故に

三八六七

體は用を有す、

三八六八

性は才を有す、

三八六九

神の活を體に用す、

三八七〇―七一

物の立を性に體す、是を以て性は氣に活して神なり、

三八七二

體は物に立ちて物なり、

三八七三

其の物に體する者は性なり、性を以て體を觀る、

三八七四

神を用する者は才なり、才を以て性を觀る、

三八七五

性は能く物に體す、物は之を幹として立す、之を本氣と謂う、

三八七六

性は能く神に用す、神は之を運して活す、之を神氣と謂う、

三八七七

立すれば則ち攸久定常なり、

三八七八

活すれば則ち倏忽變化なり、

三八七九

氣物は此の如く没露す、

三八八〇

性體は此の如く隱見す、

三八八一

此に有せらるる者は、之を有し之に走る、

三八八二

此に道せらるる者は、之に居り之に上る、

三八八三

網縊は造化を爲す、

三八八四

機跡は天命を成す、

三八八五

蓋し性は其の體を分つ。一氣一物。一一相い乗じて。二二即四なり。

三八八六

分かつては則ち氣物性體なり、

三八八七

合すれば則ち本根精英なり、

三八八八

本氣根物。

三八八九一〇

精體英性。本根は是れ物なり、

三八九一

精英は是れ神なり、

三八九二一九三

合は能く一を成す。物は其の體を幹立す、

三八九四

神は其の性を活運す、而して

三八九五

其の活立を營養する者は。廻ち體の用なり。夫れ物は大小を有す。

三八九六

大は小を統ぶ、

三八九七

小は大に散ず、

三八九八

天地は相い給資す、

三八九九

會易は相い綱縊す、

三九〇〇

小なる者は。其の綱縊に化し。其の給する所に資る。

三九〇一

是を以て。大小は神本の活立するに同じ。

三九〇二

體成りて會易なり、會は綱し易は縊す、

三九〇三

物立ちて天地なり、天は没し地は露す、

三九〇四

是を以て。會易に非ざれば、則ち氣物の其の體を一一にすること能わず、

三九〇五*

天地に非ざれば、則ち一一の其の性を氣物にすること能わず、

三九〇六*

是を以て。性は體に由りて立つ、

三九〇七

體は性を以て成る、

三九〇八

成れば則ち一は鬱淳として而して神なり、

三九〇九

一は混然として而して物なり、

三九一〇

活すれば則ち經は運して其の性を見ず、

三九一一

立すれば則ち緯は立ちて其の物を露す、故に含易は網緼す。

三九一二

分は剖きて罅縫を没す、

三九一三

合は對して條理を示す、

三九一四

融は其の麤を化す、

三九一五

通は其の精を貫す、

三九一六―一七*

是を以て。其の物に於るは。一機一體なり。機は動靜を以て活す、

三九一八

體は没露を以て立つ、

三九一九―二〇

動靜は有せざる所莫し、本氣は物を立するに於て、

三九二一

内外に轉持す、

三九二二

南北に嚆喻す、

三九二三

水火に發收す、

三九二四―二五

没露は有せざる所莫し、大物は體を成するに於て、

天物に聚散す、

(PA 287)

(I 423b)

三九二六

三九二七

三九二八

三九二九

三九三〇

三九三一

三九三二

三九三三*

三九三四

三九三五

三九三六

三九三七

三九三八

三九三九

三九四〇

三九四一

三九四二

三九四三

是に於て。氣に本す、

物に根す、

質に精す、

象に華す、

是を以て。一經一緯、神は其の經に行く、

物は其の緯に居る、

經緯通塞、宇宙は其の中に成す、

宇宙は、則ち經緯の氣の通塞する所より成る、

天地は、則ち精麤の物の没露する所より成る、

成る者は爲すに由る、

爲す者は成るに由る、

爲せば則ち通塞没露なり、

成れば則ち宇宙天地なり、蓋し

其の成るや。地體は則ち水燥土石を成す、

天體は則ち日影運轉を成す、

地物に解結す、
氣象に清濁す、
氣質に乾潤す、

三九四四

宙は率いて歲月を刻す、

三九四五

宇は容れて方位を定む

三九四六

姑く天物に就きて之を言わんに。

三九四七

經緯なる者は、宇宙を爲す者なり、故に經緯は、則ち宇宙に盡きず、

三九四八

精麤なる者は、天地を爲す者なり、故に精麤は、則ち天地に盡きず、故に

三九四九

成を推して爲を知る、

三九五〇

爲に由りて成を分つ、

三九五一

一精一麤、神は其の精に活す、

三九五二

物は其の麤に立す、

三九五三

精麤没露、天地は其の中に成る、

* 三九五四

身の居り、足の立ち、目の見え、耳の聴く所は、

則ち麤露の成る所なり、

* 三九五五―五六

居りて其の天を知らざる所は、立ちて其の地を覺えず、

三九五七

色にして之を視る可からず、

三九五八

聲にして之を聴く可からず、則ち精没の爲す所なり、

三九五九

天神は、其の物を没す、而して其の性を見す、

三九六〇

天地は、其の性を隠す、而して其の物を露す、

三九六一

體に非ざる者莫し。而して體は則ち一虚一實なり。而して

三九六二

實する者は、天地の物を露して、而して經緯に居る、

三九六三

居る者は、宇宙の天を見して、而して精麿を容る、

三九六四

宇宙は能く其の體を没す、

三九六五

天地は能く其の物を露す、夫れ

三九六六―六七

宇宙は奚を以てか之を天と謂う、時と處と偶すれば、

則ち時なる者は天なり、

(I 424a)

三九六八

處は能く物を容る、則ち容る者は天なり、而して

處なる者は地なり、

三九六九

居る者は地なり、故に

三九七〇

時處を合して、其の天と爲す、

三九七一

天地は奚を以てか之を地と謂う、氣と物と偶すれば、

(而してを欠くか。)

三九七二―七三

則ち氣なる者は天なり、

物なる者は地なり、

三九七四

地は能く天に居る、則ち居る者は地なり、故に

三九七五

天地を合して、而して其の地と爲す、

三九七六

又た進みて之を食めば、則ち

三九七七

神は能く物を爲すれば、則ち此の天も亦た地なり、

三九七八

成る者は天を成すれば、則ち此の地も亦た天なり、

三九七九

體なる者は、氣物體性を本根精英に於て物にす、

三九八〇

用なる者は、天地會易を給資綱縊に於て事にす、

三九八一

本氣は此に幹す。神氣は此に運す。之を性才と謂う。

三九八二

三九八三

之を有し之を開く。天神は之を道德に於て認む。

三九八四

本は以て根に託す、

三九八五

根は以て本に依る、依託は其の物を以て立つ、

三九八六

精は體中に隠る、

三九八七

華は物表に見る、隠見は其の神を以て活す、是に於て。

三九八八

大の一を混成するも、亦た此の本根精英なり、

三九八九

小の一を混成するも、亦た此の本根精英なり、

三九九〇

經緯の中に在れば。則ち諸を經緯に資る。

三九九一

造化は經を爲す、

三九九二

天地は緯を爲す、故に

三九九三

物の成る所は。氣物を生化し。經に従い緯に居る。故に

三九九四

物生れて未だ化せざるの間、之れ己の有する者に於る經なり、

三九九五

己成りて他の中に非ず、之れ己の有する者に於る緯なり、

三九九六

彼に經緯有りて、此れ之を彼に資らずんば、則ち焉んぞ此れ有らん、

三九九七

經緯豈に本に非ざるを得んや、

三九九八

氣聚りて己を活する者は、之を我に於て天にする者なり、

三九九九

物結びて己を立する者は、之を我に於て地にする者なり、

四〇〇〇

彼に天地有りて、此れ之を彼に資らずんば、則ち焉んぞ此れ有らん、

四〇〇一

氣物 豈に根に非ざるを得んや、

四〇〇二

本は則ち體、體に於て體する者は性、幹立して活運す、

四〇〇三

體に體するを以て、而して能く體中に隠る、豈に物の精に非ざるを得んや、

四〇〇四

物は則ち根、根に英する者は氣なり、神は有して英は發す、

四〇〇五

物に華するを以て、而して能く物表に發す、豈に物の英に非ざるを得んや、

四〇〇六―〇七

物無ければ則ち已む。有すれば則ち本根は相い依る、

(PA 290)

四〇〇八

精英は隠見す

四〇〇九

本は精を具す

四〇一〇

根は華を發す

四〇一一

闕くれば則ち具に非ず、

四〇一二

無ければ則ち有に非ず

四〇一三

物は。則ち地を根と爲す、

四〇一四

天を本と爲す

四〇一五

機に精す、

四〇一六

氣に英す

四〇一七

天地は具を設け。會易は綱縕す。

四〇一八

萬物は羅列し。而して其の間に竝立す。

四〇一九

既已に其の物を竝べ。偏偏は一に合す。是を以て。

四〇二〇

動は則ち神氣に専らなり、

四〇二一

植は則ち本氣に専らなり、

四〇二二

動は神氣に専らなるを以て、而して偏に神の用を見ず、

四〇二三

植は本氣に専らなるを以て、而して偏に物の體を立す、

四〇二四

其の各専らなる所は則ち異なりと雖も、而も

四〇二五

本根精英を具するに於ては、則ち一なり。惟だ

四〇二六

麁なる者は見易し、

四〇二七

精なる者は見難し、

四〇二八

見易きを推して、而して見難きを察す。精麁は終に一に歸す。

四〇二九

一は則ち全成す、

四〇三〇

二は則ち偏立す、

四〇三一

偏偏は分散し。一は移りて散に居る。故に

四〇三二

偏なれば則ち相い依り、

四〇三三

散ずれば則ち相い給すると雖も、而も亦た

四〇三四

偏にして全す、

四〇三五

散にして成す、蓋し。

四〇三六

氣は物の本なり、

四〇三七

物は氣の根なり、

四〇三八

之に體する者は精なり、

四〇三九

之を用うる者は英なり、故に

四〇四〇

精は物中に隠る、而して物を保營す、

四〇四一

英は物表に發す、而して神に知運す、

四〇四二

神は物を露す、

四〇四三

物は神を見す、

四〇四四

神は精英と雖も、而も没中も亦た本根の託す可き有り、

四〇四五

物は本根と雖も、而も露中も亦た精英の發を爲す有り、

四〇四六

剖析の盡きざる所なり。

四〇四七

天地は能く有す、故に之を萬物に給す、

四〇四八

萬物は給せらる、故に之を天地に資る、

四〇四九

本根精英の見易き者は、其れ艸木か。

四〇五〇―五一

其の見易きと見難きとは。蓋し見る者の通塞にして。物は則ち與らず。

四〇五二

己の知の通じ易きに依りて。其の知の難き所に通ず。觀物の法なり。

四〇五三

艸木は。種子を根に託し。根は能く枝幹に給すれば。

四〇五四

則ち枝幹を并せて根なり。夫れ物の成るは。

四〇五五

網縊せられて 其の天を立す、

四〇五六

保運する有りて其の地を成す、故に

四〇五七 本なる者は、物の網縊に得て、己奉じて以て天と爲す所の者、廻ち

四〇五八 松にして松を爲し、栢にして栢を爲す者なり、

四〇五九 精なる者は、物の得る所の天を保し、得る所の神を運し、

四〇六〇 己之を以て開き、己之を以て闔じる所の者、廻ち

四〇六一 松にして松と成り、栢にして栢と成る者なり、

四〇六二―六三 英なる者は、其の天の精華にして、根に畜え、精に運し。

四〇六三 終に之を物表に發する者なり。

四〇六四 種子を相い繼ぎて、鱗次を爲す者も、亦た此に在り。

四〇六五 諸を鳥獸に移して之を言わんに。

四〇六六 網縊の間。馬の天無くんば、世豈に馬なる者有らんや、

四〇六七 牛の天無くんば、世豈に牛なる者有らんや、

四〇六八 已に各おの其の天を奉じて立つ。

四〇六九 各おの有する所の本根精英有り。以て其の一を爲す。

四〇七〇 精は其の骨肉の根を奉立して、情欲意智は、其の神を運し。

四〇七一 英を物表に發して、天人勢を張る。

四〇七二 氣物體性を以てすれば、則ち猶お其の分有るがごとし、

四〇七三 本根精英を以てすれば、則ち相い依りて一を成す、是を以て。

四〇七四 氣物體性は、各おの其の天を得て以て其の本根精英を合するに至れば。

四〇七五

則ち天地水火より。散小萬物に至りて。異なる所有る莫し。

四〇七六

而して難易なる者は。人の私なり。

四〇七七

易なる者は。資りて鹿なる者なり。

四〇七八

難なる者は。給えて精なる者なり。

四〇七九

是を以て。没にして本根は。徳なり。體なり。

四〇八〇

露にして精華は。機なり。象なり。

四〇八一

是を以て。物なる者は。神を奉じて己を持す。

四〇八二

神なる者は。物に居りて己を運す。

四〇八三

是を以て。神なる者は。英なり。物を爲して奉ぜらる。

四〇八四

物なる者は。根なり。神の資る所を爲す。

四〇八五

神は其の各を貫す。

四〇八六

天は其の一を融す。

四〇八七

性は具して才は活す。

四〇八八

體は體して用は用す。

四〇八九

物に體する者は。廻ち本氣、天地を保持す。

四〇九〇

氣を用うる者は。廻ち神氣、造化を活運す。

四〇九一

體は則ち天地なり。

四〇九二

用は則ち營養なり。

四〇九三

立りつする者ものは則すなわち物ぶつ、之これを立りつする者ものは則すなわち本ほんなり、

四〇九四

用もちうる者ものは則すなわち氣き、之これを用もちうる者ものは則すなわち神しんなり、

四〇九五*

物ものは風日ふうにちに曝さらせば、則すなわち持じする者ものは保ほせられず、

四〇九六

生せいは戕賊しょうぞくに遇ぐせば、則すなわち持じする者ものは營えいと絶ぜつし、

四〇九七

小物しょうぶつは短期たんき、保ほせず營えいせず、其その物ものを換かえる有あり、

四〇九八

大物だいぶつは長期ちようき、保ほ營交通えいこうつうして、長ながく其その物ものを持じす、

四〇九九

處しよは洪曠こうかうにして、物ぶつは塊塊おうおうの中ちゆうに體たいす、

四一〇〇

時じは攸遠ゆうえんにして、神しんは衰衰こんこんの中ちゆうに用ようす、

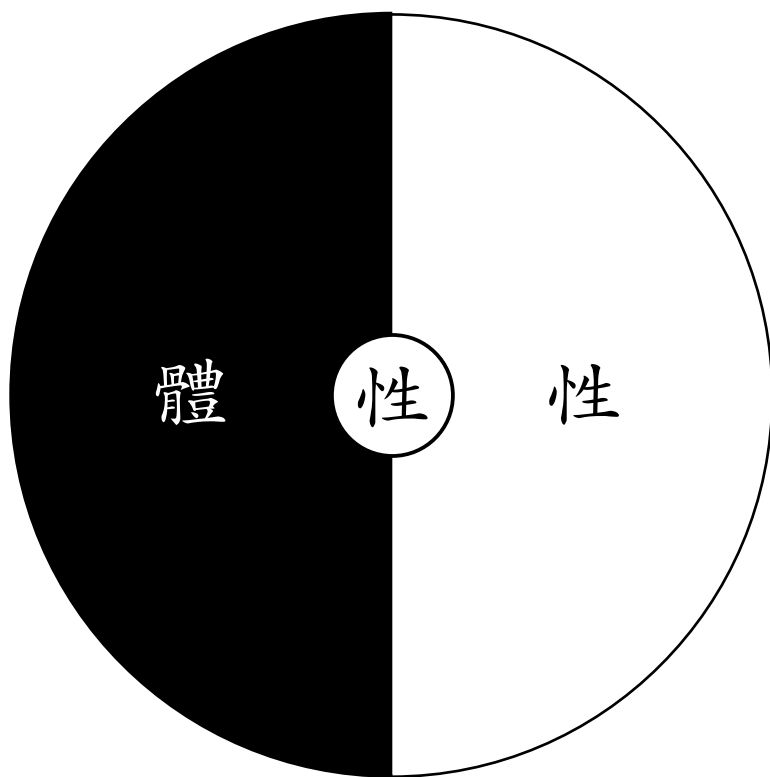
日に漸すすみて消きゆ、
漸すすみて化かに向むかう

惟ただ

(PA 293)

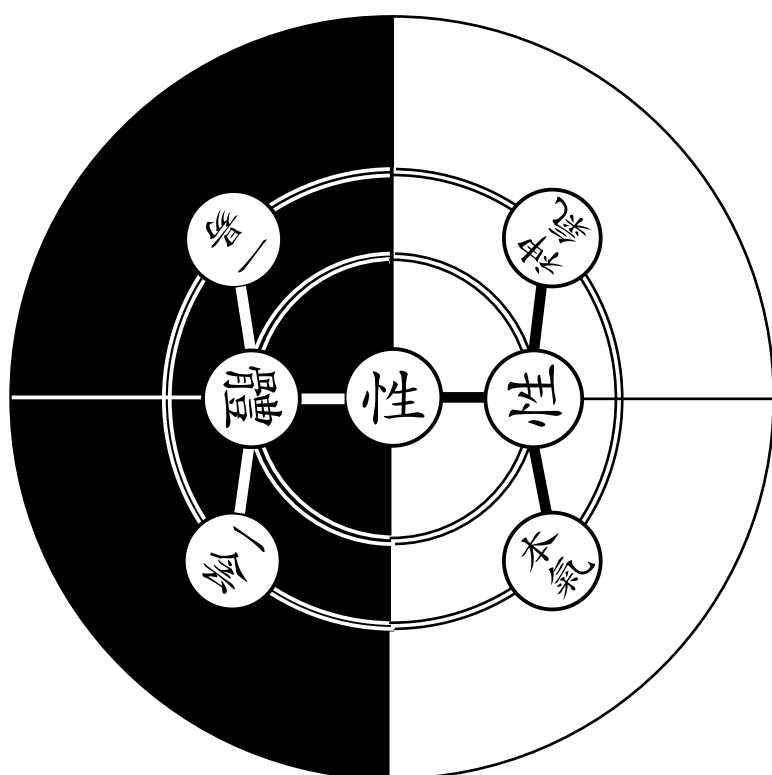
(PA 294, I 425b)

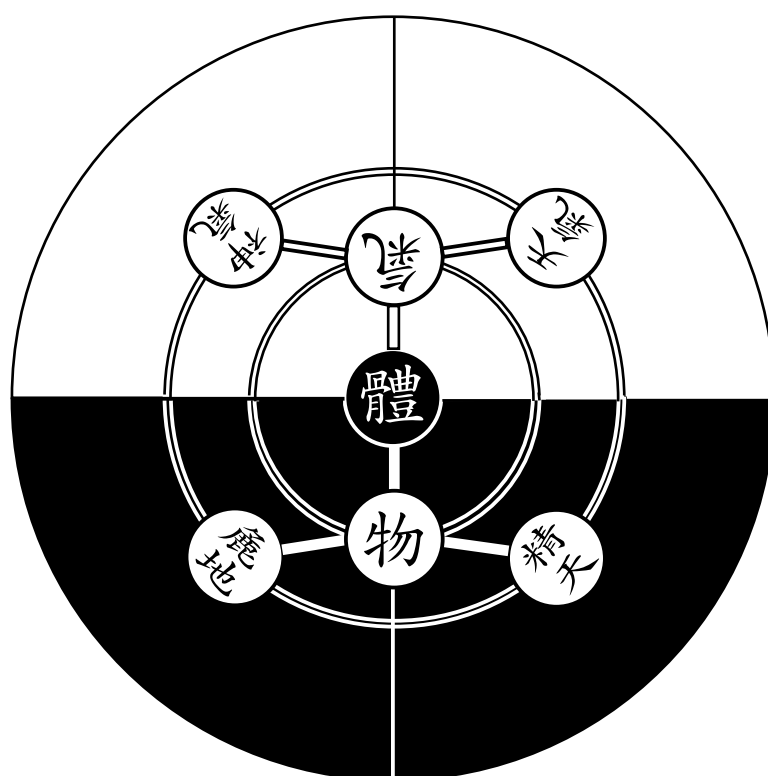
性體氣物一合



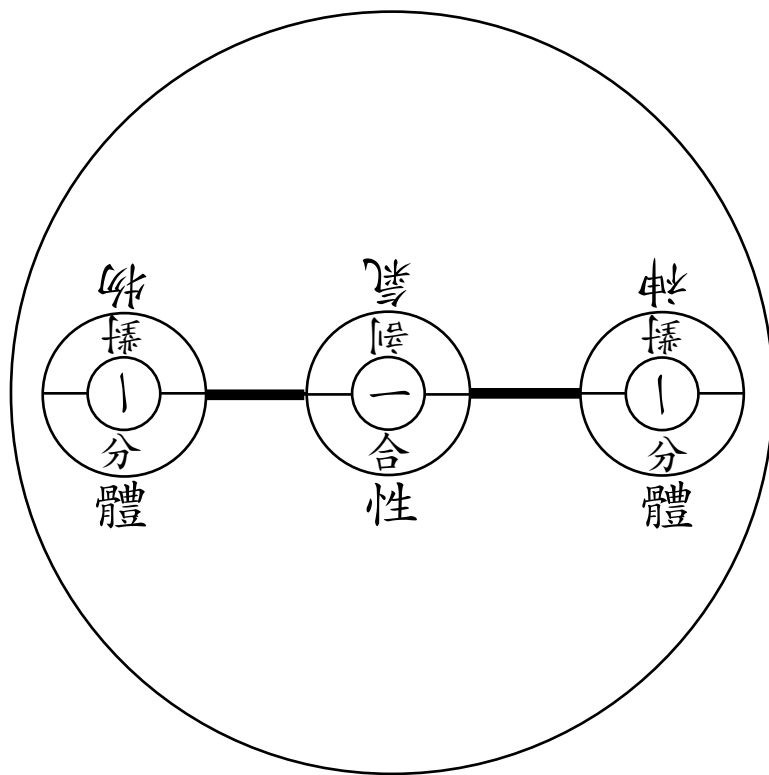


性體剖析一合

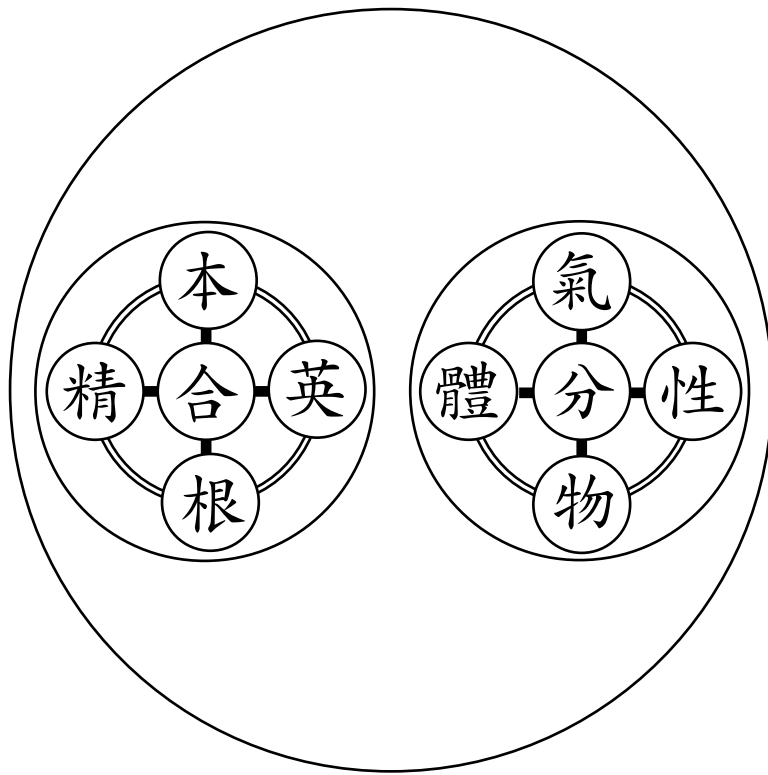


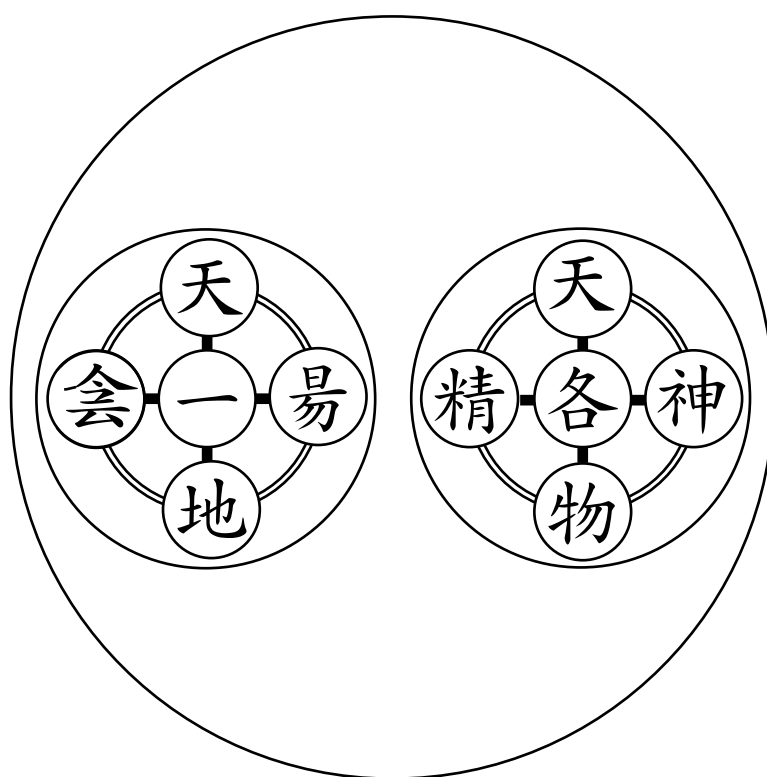


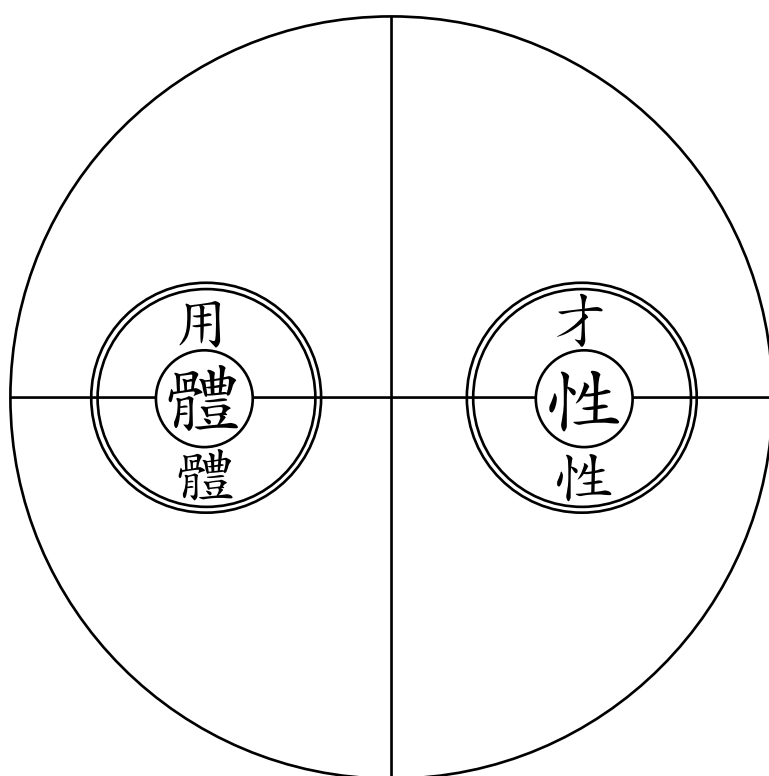
図名なし



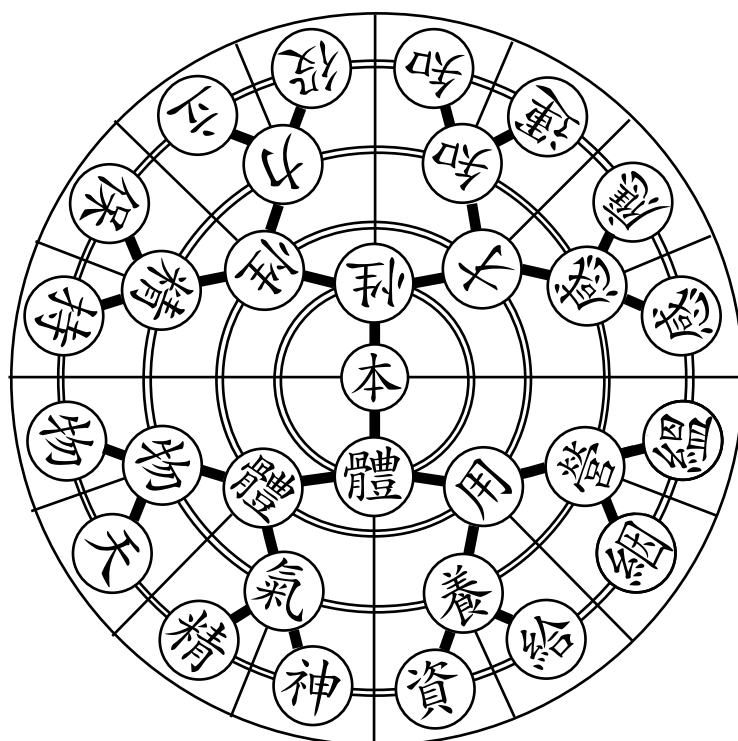
図名なし







図名なし



造化 用

四一〇六

神は精靈を活して、此の若く鬱淳たり、

四一〇七

物は天地を立して、此の若く混淪たり、

四一〇八

是を以て。一經一緯。混淪は天地を立して、而して體を緯に物す、

四一〇九

鬱淳は造化を行いて、而して用を經に事す、故に。

四一一〇

氣物は給資して、天地は立す、

四一一一

一一は網縊して、造化は行わる、是を以て。

四一一二

居として天地に非ざる靡し、

四一一三

行として造化に非ざる靡し、蓋し。

四一一四

混淪の體、

四一一五

鬱淳の用、

四一一六

氣は以て之を營す、

四一一七

物は以て之を養す、

四一一八

營する者は、易縊会網なり、

四一一九

養する者は、一給一資なり、

四一二〇

神に非ざれば則ち之を爲すること能わず、

四一二一

天に非ざれば則ち之を成すること能わず、

四一二二

爲に機する者は神なり、

四一二三 成に跡する者は誠なり、

四一二四 本に隠れ、物に露す、

四一二五 神に隠れ、跡に見る、

四一二六 跡を推して機に入る。營養の用は。逃るる所莫し。

四一二七 大物は精なるを以て、其の營養を見難し、

四一二八 動植は鹿なるを以て、其の營養を見易し、

四一二九―一三〇 孰れか一孰れか一。大物も亦た網縊を以て成る、

四一三一 小物も亦た網縊を以て成る、

四一三二 華と實とは、苗を繼ぐに網縊す、

四一三三 牝と牡とは、子を繼ぐに網縊す、

四一三四 子苗は網縊を閉じて。將に其の天地を開かんとす。開閉は相い追う。

四一三五 進めば則ち旺する在り、

四一三六 退けば則ち謝する有り、

四一三七 子苗は華實牝牡に網縊す、

四一三八 動植は日影水燥に網縊す、

四一三八^{*}1 (復元) 日影水燥は動植に於て網縊の具を爲すと雖も。

四一三九 通塞覆載。本神道德。皆な一一に網縊して成る。

四一四〇 是を以て。保持を以て立つ者は、天地なり、

四一四一

網縊を以て行う者は、造化なり、

四一四二

造化は以て經を引く、

四一四三―四四

天地は以て緯に立つ、而して保持は網縊に外ならず、

四一四五

網縊は保持に外ならず、

四一四六

之を萬物に移して。其の網縊の跡を認むるに。

四一四七

寒暑は令に従う、

四一四八

水早は常を失す、

四一四九

麴蘖は酒を醸す、

四一五〇

金石は火を出す、

四一五一

飲食は營養す、

四一五二

思慮は變錯す、

四一五三―五四

網縊の各態に非ざる莫くして。機に入り跡を著す。人は惟だ其の神を認む。

四一五五

見に難易有りと雖も。而れども造化を經に引くは。則ち一なり。是を以て。

四一五六

天は地に縊す、

四一五七

地は天に縊す、

四一五八

地も亦た天に縊す、

四一五九

天も亦た地に縊す、

四一六〇―六一

天易地会にして。而して天も亦た会易を平分す、

四一六二

地も亦た会易を平分す、故に

四一六三

天も亦た地に縊す、

四一六四

地も亦た天に縊す、

四一六五

天物は天中に並び居る、

四一六六

地物は地中に並び居る、

四一六七

然れば則ち豈に翅に子苗の動植に於るのみならんや。

四一六八

動植の立つ所も。亦た一網一縊の間のみ。

四一六九

天は以て地に給す、地は以て天に給す、天は以て地に資る、地は以て天に資る、

四一七〇

蓋し物は分るれば則ち各其の偏に依る。

四一七一

偏は偏を待ちて。而して始めて其の全を爲す。是を以て。

四一七二

水は火に資る、火は水に給す、

四一七三

火は水に資る、水は火に給す、

四一七四

天は能く地に給す、

四一七五

地は能く天に給す、

四一七六*

是を以て。地は天に資るを以て、其の地も亦た天なり、

四一七七

天は地に資るを以て、其の天も亦た地なり、故に

四一七八

会逼りて火發す、

四一七九

易噴きて水涌く

四一八〇*

是の故に。火は必ず貪淫を以て熾なり、

四一八一

水は必ず易熱を以て溢るなり、

四一八二

今一勺の水。一星の火。

四一八三

勢を繼がざるの者の相い賊するを觀て。以て造化を察す。亦た兒童の見のみ。

四一八四

剖くれば則ち一二なり、

四一八五

分るれば則ち一一なり、

四一八六

一一は相い資る、

四一八七

一二は相い給す、

四一八八

是を以て物の成る。大と無く小と無く。同じく其の神物を活立す。

四一八九

成るに反有りと雖も。而も彼此は同じく其の本根精英を全す。

四一九〇

彼に資る無んば、能く此に成らん、

四一九一*

此に給せずんば、焉んぞ能く彼に給せん、是の故に。

四一九二

露は没に資る、

四一九三―九四

見は隠に資る、而して隠も亦た見に資る、

四一九五

没も亦た露に資る、此に於て。

四一九六

網縷は相い依る、

四一九七―九八

給資は相い立つ、故に精に非ざれば則ち本根に給する無し、

四一九九

英に非ざれば則ち本根を發する無し、

四二〇〇
 四二〇一
 四二〇二
 四二〇三
 四二〇四―〇五
 四二〇六
 四二〇七―〇八
 四二〇九
 四二一〇
 四二一一
 四二一二
 四二一三
 四二一四
 四二一五
 四二一六
 四二一七
 四二一八
 四二一九

本根に非ざれば、則ち精英を有すること無し、

一は萬を有す、散は統に居る、

一に統ぶる者は、自から給し自から資る、

分れ散ずる者は、彼此相い依る、

依に親疏有り。疏は則ち疏に資る、

親は則ち親に資る、

姑く水火に就きて之を言うに。水 給して火 能く燃ゆ、

火 能く炭に居る、薪の乾く者は火の化すこと早し、
 火 給して水 能く成る、
 故に

薪の溼る者は火の持すこと久し、

水の天地に於ける、冬寒に値えば則ち涸る、

夏熱に値えば則ち溢る、

雷を發して雨 滂沱たり、

雨 甚しくして火山燃ゆ、

水を以て火に灌ぐ、

火を以て水を煮る、

養賊は相い居る。是の故に。

生する者は化する有り、

四二二〇

養する者は賊する有り、

四二二一

水火のみ獨り然るに非ず。是の故に。

四二二二

水は能く舟を浮べ、亦た能く舟を覆えす、

四二二三

臣は能く君を奉じ、亦た能く君を覆えす、

四二二四

春煦秋肅。一生一賊。

四二二五

生と賊と同じく網縊す。

四二二六

諸を艸木の榮枯。鳥獸の代謝に觀て。而して知る可きなり。

四二二七

是を以て。網縊なる者は、造化の營なり、

四二二八

給資なる者は、相依の養なり、

四二二九

雨暘燠寒。噓噏飲哺。

四二三〇

皆な天地に資ること有り。

四二三一

以て我を養う可し。

四二三二

以て我を賊す可し。

四二三三

此を以て彼を推す。

四二三四

麤を以て精を推す。具して佗無きを爲すなり。

四二三五

若し之を反觀せずして。而して以て諸を一に合すれば。則ち

四二三六

天地は隔絶し。水火は相い乖き。而して終に物に融通すること能わず。

四二三七

統らるれば則ち之に資る、

四二三八

竝ならび立たてば則すなわち相あい依よる、

四二三九

養やしなえば則すなわち賊ぞくする有あり、自じ佗たは竝ならび立たてば則すなわち然しかり。故ゆえに

*四二四〇―四一

成なりて營えいせざれば、則すなわち通つうずる者ものは繼つがざるに断たたん、

四二四二

塞ふさがる者ものは充みたざるに盡つきん、

四二四三―四四

成なりて養やしなわざれば、則すなわち立たつ者ものは斃たおる、

四二四五

行いく者ものは覆くつがえる、是この故ゆえに。

四二四六

率そつじゆう従よういは齡おなを同おなじくして、而しかして能よく攸ゆうえん遠いを行いく、

四二四七

望のぞみて其その闔とじるを視みず、

四二四八

顧かえりみて其その闔ひらくを視みず、

四二四九―五〇

闔こうへき闔ふさする者ものは塞ふさがる、塞ふさがれば則すなわち通つうに非あらず、惟ただ其その通つうを以もつて、
網いんうんぎゆうし綱こう給み資みの功みを觀みるのみ、

四二五一

容ようぎよ居りようは量おなを同おなじくして、而しかして能よく洪こうこう曠りつを立りつす、

四二五二

歸きして其その中ちゆうを盡つくさず、

四二五三

出いでて其その外がいを窮きわめず、

四二五四―五五

窮きゆうじん盡ものする者ものは晝かくす、晝かくすれば則すなわち塞そくに非あらず、惟ただ其その塞そくを以もつて、
保ほ護ご持じ守しの立りつを觀みるのみ、

四二五六

來きたりて生しやうず、

四二五七

往ゆきて化かす、

四二五八

化か化かは收おさめる有あり、

四二五九

生せい生せいは給きゆうする有あり、

四二六〇

衰衰の精と雖も、

而も生化を出ること能わず、

四二六一―六二二

已に生化を出ること能わざれば、

則ち給資は鹿と同じ、

四二六三

物にして居る、

四二六四

氣にして容る、

四二六五

容る者は中を示す、

四二六六

居る者は止を有す、

四二六七

塊塊の精と雖も、

而も中外無きこと能わず、

四二六八―六九

已に中外の無きこと能わざれば、

則ち保持は物と同じ、

四二七〇

率従は齡を同じくす、

(I 427a)

四二七一

容居は量を同じくす、

四二七二―七四

經緯は同じく然り。夫の萬物の如く。物は鹿にして跡は顯なり。生化は精しからず、

四二七五

居行は跡を有す、

四二七六

依りて立つ者は、疲るれば 則ち瘡る、

四二七七

従いて走る者は、及ばざれば則ち覆える、

四二七八

瘡るれば則ち従いて而して立つ者繼ぐ、

四二七九

覆えれば則ち起ちて而して行く者出る、

四二八〇

瘡覆は跡を示すも、亦た天地と久遠なり、

四二八一*

塊衰は痕を没すも、亦た瘡覆と畫せず、

(PA 309)

四二八二	散 <small>さん</small> よりして天地 <small>てんち</small> を觀 <small>み</small> れば、則 <small>すなわ</small> ち天地 <small>てんち</small> も亦 <small>ま</small> た萬物 <small>ばんぶつ</small> なり、
四二八三	一 <small>いち</small> よりして萬物 <small>ばんぶつ</small> を觀 <small>み</small> れば、則 <small>すなわ</small> ち萬物 <small>ばんぶつ</small> も亦 <small>ま</small> た一 <small>いち</small> なり、
四二八四	有痕 <small>うこん</small> と無痕 <small>むこん</small> と相 <small>あ</small> い隔 <small>へだ</small> つるが如 <small>ごと</small> きなれども。
四二八五	而 <small>しか</small> も彼此 <small>ひし</small> 相 <small>あ</small> い有 <small>う</small> するは則 <small>すなわ</small> ち一 <small>いち</small> なり。
四二八六	精 <small>せい</small> は體 <small>たい</small> に隱 <small>かく</small> る、
四二八七	英 <small>えい</small> は物 <small>ぶつ</small> に發 <small>はつ</small> す、
四二八八	天 <small>てん</small> は没 <small>ぼつ</small> し地 <small>ち</small> は露 <small>ろ</small> す、
四二八九	神 <small>しん</small> は爲 <small>な</small> し天 <small>てん</small> は成 <small>な</small> る、是 <small>ここ</small> を以 <small>もつ</small> て。
四二九〇	經緯 <small>けいぼつ</small> 没露 <small>ぼつ</small> は、有 <small>う</small> せざる所 <small>ところ</small> 靡 <small>な</small> ければ、則 <small>すなわ</small> ち
四二九一	宇宙 <small>うちゅう</small> 天地 <small>てんち</small> は、立 <small>た</small> たざる所 <small>ところ</small> 靡 <small>な</small> きなり、
四二九二	鬱 <small>うつ</small> 浮 <small>ぼつ</small> は爲 <small>な</small> さざる所 <small>ところ</small> 靡 <small>な</small> し、
四二九三	混淪 <small>こんりん</small> は成 <small>な</small> らざる所 <small>ところ</small> 靡 <small>な</small> し、是 <small>ここ</small> を以 <small>もつ</small> て。
四二九四	天地 <small>てんち</small> は保 <small>ほ</small> 持 <small>じ</small> を以 <small>もつ</small> て立 <small>た</small> つ、
四二九五	造化 <small>ぞうか</small> は營 <small>えい</small> 養 <small>よう</small> を以 <small>もつ</small> て行 <small>おこな</small> わる、
四二九六	二 <small>に</small> は一 <small>いち</small> に資 <small>と</small> る、
四二九七	一 <small>いち</small> は二 <small>に</small> に移 <small>うつ</small> る、
四二九八	稍 <small>や</small> や相 <small>あ</small> い移 <small>うつ</small> れば則 <small>すなわ</small> ち其 <small>そ</small> の保 <small>ほ</small> 持 <small>じ</small> 營 <small>えい</small> 養 <small>よう</small> は。
四二九九	經 <small>けい</small> を引 <small>ひ</small> きて緯 <small>い</small> に居 <small>お</small> る。散 <small>さん</small> 統 <small>とう</small> は一 <small>いち</small> なり。蓋 <small>けだ</small> し

四三〇〇
四三〇一
四三〇二
四三〇三
四三〇四
四三〇五
四三〇六
四三〇七
四三〇八
四三〇九
四三一〇
四三一一
四三一二
四三二三
四三二四
四三二五
四三二六
四三二七

星辰なる者は天物なり、精清明輕にして、景影を以て居る、
動植なる者は地物なり、麁濁臭穢にして、水燥を以て居る、
故に
我は我の與と。穢濁に境を開きて。

境を清淨に開く者と。天地を分つ。是を以て。

其の境は 清濁動止を以て剖く、

其の物は則ち乾潤明暗を以て分る

之を合すれば。則ち

輕清重濁を反して、同じく其の天地を緯に置く、

循環鱗比を反して、同じく其の造化を經に運す、
故に

星辰動植は。物を天地に同じくす。而して水燥日影の中に網縕す。

天は宙に従う、

地は宇に居る、

神は氣に遊ぶ、

本は物を結ぶ、
故に

短は長を追い小は大に居る、

其の神は其の氣に遊ぶ、

其の本は其の物を結ぶ、

彼も亦た本根精英を具す、

* 四三二八

* 四三一九一〇

四三二一

四三二二

四三二三

四三二四

四三二五

四三二六一二七

四三二八

四三二九一三〇

四三三一一二二

四三三三一二四

四三三五

四三三六

四三三七

四三三八

四三三九

四三四〇

此も亦た本根精英を具す、是の故に。

動植は同じく身生を有す。而して生は、

身は、

其の天を經通に遊ばしむ、
其の地を緯塞に立たしむ、
其の天を虚動に於て爲す、
其の地を實靜に於て成す、

是れ乃ち本なり、
是れ乃ち根なり、

精は、實なり、

英は、華なり、

本根は立すること有り。精を中に收む、

英を表に發す、

英は則ち神氣なり、物は立ちて事を感應に交う、

實は則ち本氣なり、本は保して營を網縕に事す、

網縕は鱗比繼承に於てする者なり。植は則ち華實なり、

動は則ち牝牡なり、

植は苗に繼ぐ、

動は子に繼ぐ、

之を生ずる者は則ち生ぜらるる者に非ずと雖も。而も

其の胚胎種子も亦た同じく本根精英を畜えれば。

則ち精の實を爲すや識る可し。

四三四一

蓋し物なる者は。能く天地に資り。萬物に依る。

四三四二

會易に網縊す。

四三四三

子苗に繼承す。

四三四四

内外に保護す。

四三四五

上下に持守す。

四三四六

是に於て。植は養を水土雨暘に資る、

四三四七

動は養を噉噉飲食に資る、

四三四八

動は營を有意の思辨に爲す、

四三四九

植は營を無意の知感に爲す、

四三五〇

是を以て。大小は。有する所 異ならず、

四三五一

開く所 相い反す、

四三五二

異を同中に具す、

四三五三

同を異中に成す、

四三五四

一を反中に融し、

四三五五

反を一中に隔てて、網縊給資す。

四三五六

本は以て體に幹し、

四三五七

神は以て性に運し、會易大小す。

四三五八

給資すと雖も其の情を異にす。

四三五九

本根精ほんこんせい英えいの一いちを成せいするに至いたりては。則すなわち融ゆうして有うす。

四三六〇

天地てんちは物ぶつを全ぜんすれば、則すなわち己おのれに足たらざる所ところ莫なし、

四三六一

萬物ばんぶつは天地てんちに居おれば、則すなわち天地てんちに資とらざる者もの莫なし、

四三六二

既すでに已さんに散さんじて萬物ばんぶつを爲なす。是ここに於おいて萬物ばんぶつの天地てんちに資とるは。

四三六三

厚薄こうはく偏周へんしゅう。萬ばんにして同おなじからず。蓋けだし天地てんちは一大全物いちだいぜんぶつなり。

四三六四

上うへは日月星辰にちげつせいしんを懸かく、

四三六五

下したは水火土石すいかどせきしを布しく、

四三六六

其その物ぶつは成具せいぐを爲なす、

四三六七

網緼いんぐん給資きゆうし。動植どうしよくは其そのの間かんに成なるなり。

四三六八

植しよくは偏かたよりて本氣ほんきに資とる、故ゆえに其そのの物ものを冷止れいし無意むいに立たつ、

四三六九

動どうは偏かたよりて神氣しんきに資とる、故ゆえに其そのの物ぶつを溫動おんどう有意いに立たつ、而しかして

四三七〇

動中どうちゆうは反はんを得えて、鳥ちようと爲なし獸じゆうと爲なす、

四三七一

植中しよくちゆうは反はんを得えて、艸そうと爲なし木もくと爲なす、

四三七二

彼此ひしは同おなじく天地てんちに在ある。共ともに天地てんちに資とる。則すなわち

四三七三

其そのの物ものに就つきて。其そのの物ものを求もとむ。

四三七四

末すえは猶なお本もとのごとし、

四三七五

彼かれは猶なお此これのごとし、

四三七六

其そのの各かくを以もつてすれば。則すなわち萬物ばんぶつ萬天地ばんてんち。奚いずくんぞ獨ひとり此これに盡つくさん。

四三七七

然りと雖も。我は已に我が境に居る。

四三七八

我の資りて以て此の天地を爲るを觀れば。

四三七九

則ち佗の天地に有る者は。盡く我に具す。

四三八〇

天地は我に給せざる所莫ければ。則ち天地に有る者は。盡く我に應ず。

四三八一

我に應ずる者は。盡く天地に有る。故に

四三八二

但だ一二を摘みて之を言わんに。夫れ

四三八三

天は道德性才を有す、故に我も亦た道德性才を有す、

四三八四

天は天地天神を有す、故に我も亦た天地天神を有す、是を以て。

四三八五

天の宇宙天地、人は資りて死生身生を爲す、

四三八六

天の保營知運、人は資りて營衛意爲を爲す、

四三八七

天は東西南北を成せば、則ち

四三八八

人は前後左右を成す、

四三八九

天は轉持動止を成せば、則ち

四三九〇

人は行居睡覺を成す、

四三九一

大物は則ち含網易縕なり、

四三九二

小物は則ち牡縕牝網なり、

四三九三

大物は則ち天没地露なり、

四三九四

小物は則ち生没身露なり、

四三九五

四三九六

四三九七

四三九八

四三九九

四四〇〇

四四〇一

四四〇二

四四〇三

四四〇四

四四〇五
一〇六

四四〇七

四四〇八

四四〇九

四四一〇

四四一一

四四一二

四四一三
一四

動なる者は植の偶なり。

同じく諸を天地に資ると雖も。而れども諸を彼此に反す。故に

有意を無意に於て反す、

横行を豎立に於て反す、

反を以て一に合す、

合を以て依るを爲す、是を以て。

人は則ち牆屋なり、

物は則ち營窟なり、

艸は則ち冬に枯る、

木は則ち冬に凋む、

事は異なりと雖も、而も之を保に於て資るは則ち同じ、

植は則ち水土に食す、

人は則ち水穀に食す、

蛆は穢を食す、

蟬は露を食す、

水は則ち氣を食す、

火は則ち水を食す、

食する所は異と雖も、而も之を養に於て資るは則ち同じ、是の故に。

四四一五
四四一六
四四一七
四四一八
四四一九
四四二〇
四四二一
四四二二
四四二三
四四二四
四四二五
四四二六
四四二七
四四二八
四四二九
四四三〇
四四三一
四四三二

天は則ち時を以て通ず、
我は則ち壽を以て通ず、
天は則ち物を以て塞がる、
我は則ち身を以て塞がる、
天は則ち會易の網縊を以て物を生ず、
人は則ち男女の網縊を以て子を生ず、
天は則ち本神の保營を以て繼持す、
人は則ち息食の保營を以て繼持す、
是を以て。

（行外追記につき削除）

神は則ち爲して跡を見さず、
人は則ち作るに肢體を用う、
天は則ち行くに足を用いず、
人は則ち行くに足を用う、
是の故に。
天地は聲色臭味を内に有す、
故に外より取るの門無し、
物は則ち聲色臭味を外に有す、
故に外より取るの門有り、
動は外より取るの門を開く、
植は外より取るの門を閉ず、
用と不用とを反するなり。而して

四四三三 魚は耳を目に并す、
四四三四 蛇は足を腹に兼ね、
四四三五 同じく之を天地に資る、
四四三六 還りて之を彼此に反す、
四四三七 会易は網縊す、彼此は給資す、
四四三八 内は衛り外は護う、以て立ち以て行う、
四四三九 華は發し子は結ぶ、物を立て他を役す、
四四四〇 外は統べ内は實す、以て知り以て通ず、
四四四一 幹立して物は混淪たり、
四四四二 活運して神は鬱淳たり、蓋し
四四四三 精麁は物を分つ、天物精神は各を立す、
四四四四 幹運は物に體す、本根精英は一を成す、故に
四四四五 物の各立する所は、則ち本根精英。一を成して相い隨う。夫れ
四四四六 網縊なる者は、会易の用なり、
四四四七 造化なる者は、網縊の痕なり、
四四四八 天地は、其の戸を開きて、之を途に上す、
四四四九 天神は、其の機に入りて、之を跡に成す、
四四五〇 網縊は痕無し。

四四五一
四四五二
四四五三
四四五四
四四五五
四四五六
四四五七
四四五八
四四五九
四四六〇
四四六一
四四六二
四四六三
四四六四
四四六五
四四六六
四四六七
四四六八

神妙は機に入る、

天誠は跡を成す、

人は其の見を罩め。其の蘊を窺う。

拵う可からざるの天に蒙し、

測る可からざるの神に眩す、

窺竄百端。賊を捉えて子と爲す。

機は途に上れば、則ち往かしめ來らしむ、

跡は物に成れば、則ち以て生じ以て化す、

施よりして造化す、

受よりして天命す、夫れ

一二なる者は沿いて剖く、

一一なる者は並びて對す、

跡を着れば則ち認む。会易綱縉。其の神や妙なり。

機に入り機を出づ。誠は以て之を認む。故に

天にして運轉變化す、

人にして意念情態す、

水旱沴祥

殺活予奪、

四四六九

事として網縊の機に入り機を出るに非ざる莫きなり。

四四七〇

物は動止を有すると雖も、而も形體を以てせざれば、則ち見れず、

四四七一

氣は網縊を以てすと雖も、而も機跡を以てせざれば、則ち認めず、

四四七二

能く見れ能く認む。事物の此の如き所以なり。

四四七三

然ら使むる者は、神の精靈なり、機に入り機を出す、

四四七四

自から然る者は、天の形貌なり、神を收め跡を成す、

四四七五

神運は態有り、

四四七六

天成は貌有り、

四四七七

變態定貌にして。網縊錯雜す。

四四七八

蓋し二は一を剖きて。一会一易なり。

四四七九

会は会に専らなり、

四四八〇

易は易に専らなり、

四四八一

一移りて二に居れば。則ち

四四八二

易も亦た一を全す、

四四八三

会も亦た一を全す、然りと雖も。

四四八四

易境は会境の全に非ず、

四四八五

会境は易境の全に異なり、故に

四四八六

網縊すれば則ち造化す。機に入り機を出づ。

四四八七
四四八八
四四八九
四四九〇
四四九一
四四九二
四四九三
四四九四
四四九五
四四九六
四四九七
四四九八
四四九九
四五〇〇
四五〇一
四五〇二
四五〇三
四五〇四

入る者は則ち神なり、

出る者は則ち跡なり、

跡にして天命成る。

天命の成る所は。之を一に於て貌にして。

而して本然を觀る。既已に本然は。

自に歸し使に歸す。有意の私する有り。

是に於て。天地は緯に宅す、

造化は經に行わる、

體は以て天地を立つ、

用は以て造化を行う、蓋し

一一の道。物は相い隔てば、則ち其の體は相い隔たる、

氣は將に合せば、則ち各の氣は相い交わる、

氣物は物を立つ、

交接は事を行う、

一一の剖きて相い竝ぶや。反を偶して合す。

竝ぶ者は、與にして疏す、

反す者は、偶にして親す、

親疏は綯縕して。機は感應に入る。

四五〇五	造化 <small>ぞうか</small> は便 <small>すなわ</small> ち鬼神 <small>きしん</small> を役使 <small>えきし</small> す。夫 <small>そ</small> れ
四五〇六	物 <small>ぶつ</small> は容載 <small>ようさい</small> の <small>かん</small> 間に塞 <small>ふさ</small> がる、
四五〇七	氣 <small>き</small> は往來 <small>おうらい</small> の經 <small>けい</small> に通 <small>つう</small> じる、
四五〇八	天地 <small>てんち</small> は佗 <small>た</small> 無し、塞 <small>そく</small> の物 <small>ぶつ</small> なり、
四五〇九	造化 <small>ぞうか</small> は佗 <small>た</small> 無し、通 <small>つう</small> の氣 <small>き</small> なり、
四五一〇	神 <small>しん</small> は變 <small>へん</small> ず、故 <small>ゆえ</small> に移 <small>うつ</small> りて不窮 <small>ふきゆう</small> なり、
四五一一	天 <small>てん</small> は定 <small>さだま</small> る、故 <small>ゆえ</small> に常 <small>つね</small> にして攸遠 <small>ゆうえん</small> なり、
四五一二	夫 <small>そ</small> れ一盞 <small>いっせん</small> の燈 <small>とう</small> 。徹夜 <small>てつや</small> 其 <small>そ</small> の觀 <small>かん</small> を變 <small>へん</small> ぜずと雖 <small>いえど</small> も。
四五一三	一條 <small>いちじよう</small> の水 <small>みづ</small> 。終古 <small>しゅうこ</small> 其 <small>な</small> の流 <small>なが</small> れを改 <small>あらた</small> めずと雖 <small>いえど</small> も。
*四五一四	而 <small>しか</small> れども前火 <small>ぜんか</small> は後火 <small>こうか</small> に非 <small>あら</small> ず。後水 <small>こうすい</small> は前水 <small>ぜんすい</small> に非 <small>あら</small> ず。是 <small>ここ</small> を以 <small>もつ</small> て。
四五一五	天地 <small>てんち</small> と萬物 <small>ばんぶつ</small> と。常 <small>つね</small> に生 <small>せい</small> 生化 <small>せいか</small> 化 <small>か</small> す。
四五一六	生 <small>せい</small> 化 <small>か</small> なる者 <small>もの</small> は、造 <small>ぞう</small> 化 <small>か</small> の物 <small>ぶつ</small> に在 <small>あ</small> るなり、
四五一七	造 <small>ぞう</small> 化 <small>か</small> なる者 <small>もの</small> は、生 <small>せい</small> 化 <small>か</small> の氣 <small>き</small> に在 <small>あ</small> るなり、
四五一八	氣 <small>き</small> に在 <small>あ</small> る者 <small>もの</small> は、一団 <small>いちだん</small> の鬱 <small>うつ</small> 淳 <small>ぼん</small> なり。
四五一九	氣 <small>き</small> を以 <small>もつ</small> て物 <small>ぶつ</small> に屬 <small>ぞく</small> す。機 <small>き</small> に入 <small>い</small> りて跡 <small>せき</small> に着 <small>つ</small> く。
四五二〇	始 <small>はじ</small> まる者 <small>もの</small> は終 <small>おわ</small> るに繼 <small>つ</small> ぐ、
四五二一	來 <small>き</small> たる者 <small>もの</small> は往 <small>ゆ</small> くを逐 <small>お</small> う、
四五二二	闢 <small>ひら</small> かず闔 <small>と</small> じず、

四五二三 故ならず新ならず。
四五二四 * 往と來とは。氣物の相い通ずるなり。是に於て。
四五二五 往く者は住する者を率いて移る。
四五二六 來る者は未なる者を以て至る。蓋し
四五二七 天物の精と、地物の實なる者とは、共に生化の端を没す、
四五二八 水火の麤と、動植の虚なる者とは、共に生化の端を露す、
四五二九 露すと雖も而も端緒無し、
四五三〇 没すと雖も而も端倪有り、
四五三一 見露は自から異と雖も、而も
四五三二 居れば則ち同じく其の宅を有す、
四五三三 行けば則ち同じく其の路を行く、
四五三四 宅は則ち緯塞なり、塞する者は容居す、
四五三五 路は則ち經通なり、通ずる者は往來す、
四五三六 來れば則ち生じ、往けば則ち化す者は、
四五三七 來る者は則ち當り、往く者は則ち遇うは、
四五三八 緯體經用は。爲に造化す、
四五三九 成に天命す、
四五四〇 緯體は經用の行を要すれば、則ち各起りて事に從う、

故ならず新ならず。

往と來とは。氣物の相い通ずるなり。是に於て。

往く者は住する者を率いて移る。

來る者は未なる者を以て至る。蓋し

天物の精と、地物の實なる者とは、共に生化の端を没す、

水火の麤と、動植の虚なる者とは、共に生化の端を露す、

露すと雖も而も端緒無し、

没すと雖も而も端倪有り、

見露は自から異と雖も、而も

居れば則ち同じく其の宅を有す、

行けば則ち同じく其の路を行く、

宅は則ち緯塞なり、塞する者は容居す、

路は則ち經通なり、通ずる者は往來す、

來れば則ち生じ、往けば則ち化す者は、

來る者は則ち當り、往く者は則ち遇うは、
廻ち造化なり、
廻ち天命なり、

緯體經用は。爲に造化す、

成に天命す、

緯體は經用の行を要すれば、則ち各起りて事に從う、

四五四一

經用は緯要の體に託すれば、則ち各居りて物を住す、

四五四二

蓋し神通は。往來なり。

四五四三

往來の麁なる者は、方を緯に立す、

四五四四

往來の精なる者は、方を經に立す、

四五四五

經は前後を方にす、

四五四六

緯は内外を方にす、

四五四七

往來なる者は、行なり、而して行く者は方を用う、

四五四八

容居なる者は、居なり、而して居る者は位に由る、故に

四五四九

行く者は則ち駸駸たり、其の動に従わざる者莫し、

四五五〇

居る者は則ち洋洋たり、其の止に住せざる者莫し、故に

四五五一

行く者は居中に住す、

四五五二

居る者は行中に行く、

四五五三

東西して已まざるも、亦た此の中に住す、

四五五四

幹立して去らざるも、亦た此の中に行く、是の故に。

四五五五

通じて窮まらざるも、亦た此の天地を維す、

四五五六

塞して能く住ざるも、亦た此の前後を走る、是を以て。

四五五七

人と物と。體を以て天地に居る、

四五五八

壽を以て日月を追う、

四五五九

是に於て。物は來りて後に向う、

四五六〇

時は往きて前に向う、故に

四五六一

時は則ち前に向いて生じ、後に向いて從いて化す、

四五六二

物は則ち後に向いて生じ、今を過ぎて化す、故に

四五六三

精よりすれば則ち化は後に在り、

四五六四

麤よりすれば則ち生は後に在り、

四五六五

緯に涯り無き者は、經に涯り無し、

四五六六

緯に涯り有る者は、經に涯り有り、是を以て。

四五六七

處は則ち塊塊にして、天地は則ち中外有り、

四五六八

時は則ち衰衰にして、造化は則ち前後有り、

四五六九

中に中無く、外に外無く、

四五七〇―七一

前に前無く、後に後無ければ、則ち其の物を爲すや大なり、

四五七二

日月は、則ち無前の前よりして、而して衰衰を追う、其の期を爲すや長なり、

四五七三

天地は、則ち無外の外を盡して、而して塊塊に居る、是を以て

四五七四

之を経し之を緯す。洋洋滾滾。及ばざる所莫し。

四五七五

麤小の物は。天地の爲に網縊せらる。

四五七六

感應の在る所。有涯の身生を化す。

四五七七

四五七八

身生は既に涯り有り。是に於て

四五七九

物に居りて物に及ばず、

四五八〇

時を追いて時に及ばず、

四五八一

孰れか此の境を執りて。而して彼の境を窺う。終に思いに泥む。何となれば則ち

四五八二

有意は。此の體を得るを以て生と爲す、

四五八三

此の體を失うを以て化と爲す、

四五八四

是れ有限の起滅なり。之を得て自から私す。終に生化の故に通ぜず。

四五八五

精麁は則ち生化の態を異にす。生化は則ち精麁長短を隔てず。

四五八六―八七

有限と無く。無限と無く。今を得て 見る者は皆な生ず、

四五八八

今を失して没する者は皆な化す、

四五八九

網縷は氣物を解結聚散に役す。

四五九〇

緯に解結聚散する者は 其の體は恒久なり、

四五九一

經に解結聚散する者は 其の物は倏忽なり、

四五九二

其の物は倏忽と雖も、而も相繼ぐ者は断たず、

四五九三

其の體は恒久と雖も、而も往復する者は端を換えれば、則ち

四五九四

此れも亦た猶お彼のごとし、

四五九五

彼れも亦た猶お此のごとし、是を以て。

四五九六

時なる者は、往きて生ず、生は將にせんとするに向かい 化は既にするに退く、

(PA 318)

(I 430a)

四五九七

物なる者は、來りて生ず。生は將にせんとするより來る。化は既にするに去る。

四五九八

將にせんとするに向う者は。既にするに去る者に會す。故に

四五九九

前後を没して。而して會を今に於て露す。

四六〇〇

體を持し跡を成す者は。皆な斯の中に生化す。

四六〇一

天地なる者は、緯なり、

四六〇二

往來なる者は、經なり、

四六〇三
一〇四

緯は物なり、而して經は氣なり、

四六〇五
一〇六

氣は活す、而して物は立す、

四六〇七

物は宅を得て居る、

四六〇八

神は路に由て遊ぶ、

四六〇九

物は能く緯に立つと雖も、而も

四六一〇

神は能く經に遊ぶ、

四六一一

緯は則ち容居の物なり、

四六一二

經は則ち造化の氣なり、

四六一三

造は則ち活す、

四六一四

化は則ち死す、故に

四六一五

神は活を將にせんとするに畜う、而して

四六一六

死を既にするに送る、

四六一七
四六一八
四六一九
四六二〇
四六二一
四六二二
四六二三
四六二四
四六二五
四六二六
四六二七
四六二八
四六二九
四六三〇
四六三一
四六三二
四六三三
四六三四

將にせんとする者は未だ活せず、

既にする者は終に化す。

將既は端を爲す、而して

今に當りて活す。

今に當りて萬有は皆な露す。

造は前に隠る、

化は後に没す。

是の故に。循環鱗比は。鬱淳として。盡く萬有を露す。

是を以て。氣聚りて物結ぶ、

物解けて氣散ず、

聚結して物生す、

散解して物化す、

天地と萬物と。同じく物なるのみ。

其の體を結持す、

其の氣を散通す、

網縕の跡する所なり。夫れ

生する者は、神爲の發なり、

化する者は、天成の收なり、

四六三五
四六三六
四六三七
四六三八
四六三九
四六四〇
四六四一
四六四二
四六四三
四六四四
四六四五
四六四六
四六四七
四六四八
四六四九
四六五〇
四六五一
四六五二

緯に於ては、則ち動靜に活息す、
經に於ては、則ち生化に活息す、
神物經緯の用は然り。是を以て。
緯は散結を張りて宇に横わる、
經は生化に引きて宙に豎す、
成具は、則ち常に一體を持す、
散物は、則ち毎に其の體を換う、
常に一體を持する者は、精にして生化を示さず、
毎に其の體を換る者は、麤にして生化を露す、
有せざるして無なる者は、廼ち無なり、
明ならずして幽なる者は、廼ち幽なり、
露して有り、没して無きは、
起れば則ち明、滅すれば則ち幽なるは、
是を以て。幽明は則ち神の地なり、
没露は則ち物の用なり、故に
没するや、氣に幽にして、而して物に無し、
起するや、氣に明にして、而して物に有り、
故に。萬物は聚散解結して、而して

則ち有中の没露なり、
則ち明中の幽明なり、
故に

四六五三*

無^むは幽^{ゆう}に之^ゆき、幽^{ゆう}は明^{めい}に之^ゆく、

四六五四

明^{めい}は幽^{ゆう}に之^ゆき、有^うは無^むに之^ゆく、

四六五五

氣^きにして體^{たい}を結^{むす}ぶ、故^{ゆえ}に物^{ぶつ}なり、

四六五六

物^{ぶつ}にして體^{たい}を解^とく、故^{ゆえ}に氣^きなり、

四六五七*

是^こを以^{もつ}て。物^{ぶつ}は。結^{むす}べば則^{すなわ}ち有^あり、

四六五八

解^{とけ}れば則^{すなわ}ち無^なし、

四六五九

人^{じん}にして華^かを發^{はつ}す。故^{ゆえ}に神^{しん}なり。

四六六〇*

是^こを以^{もつ}て。神^{しん}發^{はつ}すれば則^{すなわ}ち明^{めい}なり、

四六六一

神^{しん}没^{ぼつ}すれば則^{すなわ}ち幽^{ゆう}なり、

四六六二*

是^こを以^{もつ}て。我^{われ}の天^{てん}地^ちに居^おるや。

四六六三

物^{ぶつ}を結^{むす}びて神^{しん}を發^{はつ}す、

四六六四

神^{しん}を没^{ぼつ}して物^{ぶつ}を解^とく、

四六六五*

故^{ゆえ}に明^{めい}有^あるの間^{かん}。没^{ぼつ}露^ろ起^き滅^{めつ}す。

四六六六

天^{てん}は幽^{ゆう}明^{めい}有^あ無^むを具^ぐす、

四六六七

物^{ぶつ}は幽^{ゆう}明^{めい}有^あ無^むに遊^{ゆう}す、

四六六八

具^ぐする者^{もの}は、之^{これ}を兩^{ふた}つながら全^{まった}くす、

四六六九

遊^{あそ}ぶ者^{もの}は、明^{めい}の有^あるを以^{もつ}て其^その分^{ぶん}と爲^なす、

四六七〇

幽^{ゆう}の無^なきを以^{もつ}て分^{ぶん}の外^{そと}と爲^なす、

四六七

無^むなる者^{もの}は有^うせず、

四六七二

幽^{ゆう}なる者^{もの}は明^{めい}ならず。

四六七三

幽ゆうを察さつして明めいに入いる、

四六七四

無^むを説^ときて有^うに入^いる

四六七五

噫。^{ああ}
無^むにして説^とく可^べくんば、

豈あに無むと云いわんや、

四六七六

幽ゆうにして知る可べくんば、

豈^あに幽^{ゆう}と云^いわんや。

四六七七

じょうたいは じょうたい すなわ 常體は 則ち 無窮なり、
むきゆう

四六七八

かんだい
すなわ
ゆうきゆう
換體は則ち有窮なり

四*
六
七
九

共に一氣いちきの通つうなり。

四六八〇

虚實は、
體の塞なり、

四六八一

生化はせい氣きの通つうなり、故ゆえに

四六八二

燈あかりを密器みつきの中ちゆうに點てんずる、
 化化かかすること能あたわざれば、

すなわ せいせい
則ち生生を繼つがず、

四六三

穀こくを豊ほう艸そうの際さいに蒔うゆ、
艸くさ茂されば則すなち穀こくは瘠つかる

四*
六
八
四

一氣いちきの所通しよつうを觀みる可べきなり。是この故ゆえに。

四六八五

樹は長じて子結ぶ

四六八六

子^みは隕^おちて樹^{じゅ}生^{うま}る

四六八七

樹中^{じゅちゅう}は子^みを有^うせず、

四六八八

子中は樹を有せず

四六八九

雨露も之を有せず、

四六九〇

水土も之を有せず、

四六九一

若し無は物を生ずと曰わば、則ち腐種は能く生じ、枯樹は更に榮せん、

四六九二

若し有りと曰わば、則ち當に素より之を有すべし、奚んぞ必ずしも生ずる者を俟たん、

四六九三

生生の頤いは濠し、無は如し有なる可くんば、則ち天地は塞らん、

四六九四

化化の道は微なり、有は如し無なる可くんば、則ち天地は竭きん、

四六九五

無は生ずること能わず、

四六九六

有は變ずること能わず、

四六九七

有無は那ぞ造化の蘊を開かん。

四六九八

之を煦すれば、則ち氣を爲し神を爲す、

四六九九

之を液すれば、則ち津を爲し體を爲す、

四七〇〇

之を火にすれば、則ち烟と爲り燄と爲り、光と爲り熱と爲る、

四七〇一

之を水にすれば、則ち苔と爲り菌と爲り、臭と爲り穢と爲る、

四七〇二

一氣は通じて然るなり。是の故に。

四七〇三―四

火は木を以て薪と爲す、木は盡きず、則ち火も亦た盡ざれば、地に在る者の生化なり、

四七〇五―五

日は影を以て薪と爲す、影は盡きず、則ち日も亦た盡ざれば、天に在る者の生化なり、

四七〇七

故に水は無體の火に依りて命を爲す、

四七〇八

影は有象の日に依りて命を爲す、

四七〇九

四七一〇

四七一*

四七一二

四七一三

四七一四

四七一五

四七一六

四七一七

四七一八

四七一九

四七二〇

四七二一

四七二二

四七二三

四七二四

四七二五

四七二六

山は艸木の多きが爲にして高きを加えず、
海は沙石の降るが爲にして浅きを加えず、

是を以て。經は緯に居る、

緯は經を行く、

没跡と露跡と、精麁を分つ、

無窮と有窮と、生化を同す、

聚まりて生じ散じて化す。聚散生化する者は。一氣の通なり。

聚散は、氣なり、

生化は、物なり、

氣は、易なり、

物は、会なり、

聚まる者は、易の会に之くなり、

散ずる者は、会の易に之くなり、

氣は象無し、

物は體有り、

生ずる者は、無の有に之くなり、

化する者は、有の無に之くなり、

聚は、会なり、

四七二七
四七二八
四七二九
四七三〇
四七三一
四七三二
四七三三
四七三四
四七三五
四七三六
四七三七
四七三八
四七三九
四七四〇
四七四一
四七四二
四七四三
四七四四

生は、易なり。
散は、易なり。
化は、会なり。
会易の道は。端倪し難きなり。夫れ
日月水土の類は。常有にして生化に與らざる者の如しと雖も。而も生生化化す。
惟だ端倪を爲し難きのみ。
山は水を發す、而して生生は盡きず、
海は氣を噴く、而して化化は息まず、
燭光の宛然として動かざる者は。油氣の下より生生するなり。
其の遂に大ならざる者は。外に向いて化化するなり。
化すると雖も、生すれば則ち盡きず、
生すると雖も、化すれば則ち大ならず、
是れ之を常と謂う。常にして無窮。生生に與らざる者の如し。
故に天地と雖も。亦た生化は已まず。
若し夫れ天地、生化せずんば。則ち天地の間物。何ぞ獨り生化せん。
天地、生化せずんば。則ち
古の天地、更に新にして、
今の天地、更に故ならん、

四七四五

人は皆みなな曰いわく。氣きは至いたりて生せいず、

四七四六

氣きは盡つきて化かす。氣きは豈あに盡つきる可べけんやと。

四七四七

生せいずる者ものも氣きなり、

四七四八

化かする者ものも氣きなり、

四七四九

生せい氣き 病やめば則すなち化か氣きは動うごく、

四七五〇

生せい氣き 盡つきれば則すなち化か氣きは旺おうす、

四七五一

夫それ物ぶつの成なりて天てんに應おうずるは、給きゅうに資とるなり、

四七五二

神しんの活かつして通つうに運うんするは、細いんに縊うんするなり、

四七五三

故ゆえに諸しよ味みの鼎てい中ちゆうに在あるは。

四七五四

其その執とりて貫かん徹てつせざる無なくして而しかして各おの各おの能よく其その味あじを成なす。故ゆえに

四七五五

盈えい縮しゆ消しょう長ちやう。

四七五六

闔こう闔へき旺おう衰すい。

四七五七

天てん變へん地ち動どう。

四七五八

世せ態たい人にん情じやう。

四七五九

經けい緯い全ぜん散さん。

四七六〇

紛ふん紛ふん若じやく若じやく。

四七六一

皆みなな我われと。一いち鼎てい中ちゆうに在あり。同おなじく薰くん蒸じやうせらるる者ものなり。

四七六二

同おなじく薰くん蒸じやうせらるると雖いえども。剖さきて其その物ぶつを各かくにすれば。則すなち其その氣きも亦また各かくなり。

四七六三

故^{ゆゑ}に至^し精^{せい}の得^えて其^その跡^{せき}を窺^{うかが}う可^べからざるより。

四七六四

天地^{てんち}の解^{かい}結^{けつ}。

四七六五

轉^{てん}持^じの運^{うん}動^{どう}。

四七六六

日^に影^{えい}の精^{せい}。

四七六七

水^{すい}燥^{そう}の鹿^そ。

四七六八

金^{きん}石^{せき}の久^{きゅう}。

四七六九

雲^{うん}雨^うの忽^{こつ}。

四七七〇

鳥^{ちようじゆう}獸^{そう}艸^{そう}木^{もく}の其^その跡^{せき}を拵^おわざるに至^{いた}りては。各^{かく}態^{たい}一^{いち}氣^きなり。

四七七一

易^{よう}は縊^{うん}し衾^{いん}は縊^{いん}。機^きに入り跡^{せき}を著^{あらわ}す。

四七七二

夫^それ物^{ぶつ}は各^{おの}の諸^{しよ}偶^{ぐう}を有^うす。網^{いん}縊^{うん}に非^{あら}ざる無^なしと雖^{いえど}も。

四七七三

與^よは則^{すなわ}ち疏^そなり。

四七七四

偶^{ぐう}は則^{すなわ}ち親^{しん}なり。故^{ゆゑ}に

四七七五

天^{てん}散^{さん}地^ち結^{けつ}、日^に發^{はつ}影^{えい}收^{しゆう}なる者^{もの}は、則^{すなわ}ち相^あい竝^{なら}びて緯^いに成^なる、

四七七六

神^{しん}爲^い天^{てん}成^{せい}、時^じ往^{おう}物^{ぶつ}來^{らい}なる者^{もの}は、則^{すなわ}ち相^あい重^{かさ}りて經^{けい}に成^なる、

四七七七

夫^それ萬^{ばん}物^{ぶつ}の此^この間^{かん}に於^おける。體^{たい}は散^{さん}じ氣^きは鹿^そにして。

四七七八

天^{てん}氣^き地^ち質^{しつ}の中^{ちゆう}に居^おり。

四七七九

水^{すい}燥^{そう}日^に影^{えい}の氣^きを受^うく。

四七八〇

天^{てん}は地^ちを抱^{いだ}く、

四七八一

地は天を奉ず、故に

四七八二

日影は往來す、

四七八三

水燥は發收す、而して

四七八四

日燥は則ち煦して發達す、

四七八五

影水は則ち肅して閉藏す、是に於て。

四七八六

春夏は則ち煦煦、鳥獸は孳尾し、艸木は榮茂す、

四七八七

秋冬は則ち肅肅、諸動は閉蟄し、艸木は實枯す、

四七八八

易煦會肅は。網縕の痕なり。其の成る所よりするなり。

四七八九

動は牝牡を以て生ず、

四七九〇

植は華實を以て生ず、

四七九一

魚龍は水に生ず、

四七九二

鳥獸は燥に生ず、

四七九三

艸木は土に生ず、

四七九四

藻苔は石に生ず、

四七九五

五榑の蠹、木に生ず、

四七九六

寄生の生、佗木に託す、

四七九七

水は火に由りて化す、

四七九八

火は水に由りて化す、

四七九九 其の事は無窮と雖も。其の實は一氣の通なり。
四八〇〇 或いは往來を露す、
四八〇一 或いは始終を示す、
四八〇二 造なる者は、会網の痕なり、活して爲す、
四八〇三 化なる者は、易縊の痕なり、運して變ず、
四八〇四 生化なる者は、秒忽、相換る。
四八〇五 麁にして一始終を爲すに至りて。而して始めて循環鱗比を分つ。
四八〇六 盈縮消長。榮枯老壯。触るるに従いて態を異にすと雖も。
四八〇七 * 通氣の旺衰なり。而して生化なる者は、旺衰の端なり。
四八〇八 生化なる者は一始終なり。世と曰い。代と曰い。壽と曰い。歳と曰い。
四八〇九 之を通ずれば則ち佗に非ず。故に
四八一〇 彼に在りては生化と爲す、
四八一 此に在りては死生と爲す、
四八一二 物に在りては。起滅と曰う。成壞と曰う。興廢と曰う。云云と曰う。
四八一三 無意に任すを、死生と曰う、
四八一四 有意に任すを、殺活と曰う、
四八一五 同じく神爲の網縊なり。
四八一六 生生の保養は、生氣以て物を育む、

四八一七

虐癘ぎやくれいの戕害しようがいは、賊氣ぞくき以て生せいを傷なう

四八一八

生せい化かを爲いする者ものは、則すなわち形跡けいせきを得えず、

四八一九

生せい化かを成せいする者ものは、則すなわち形跡けいせきを示しめす、

四八二〇

動どうにして保營ほえいす、

四八二一

結けつにして持守じしゅす、

四八二二

來きたりて生せいに入いる、

四八二三

往ゆきて化かに入いる、

四八二四

生せい來らいして今こんの宅たくに居おる、

四八二五

死し去きよして既すでにすするの途とに就つく、

四八二六

天てん地ちは此こに活かつす、

四八二七

天てん神しんは此こに生せいす、

四八二八

萬ばん露ろは此この宅たくに來きたりて湊あつらざるを得えず、

四八二九

萬ばん沒ぼつは去さりて此この途とに就つかざる能あたわず、

四八三〇

宅たくに會かいす、

四八三一

路ろに違いす、

四八三二

會かい違いの經けいを爲なす者ものなり。蓋けだし

四八三三

萬ばん物ぶつは布ふ列れつす、

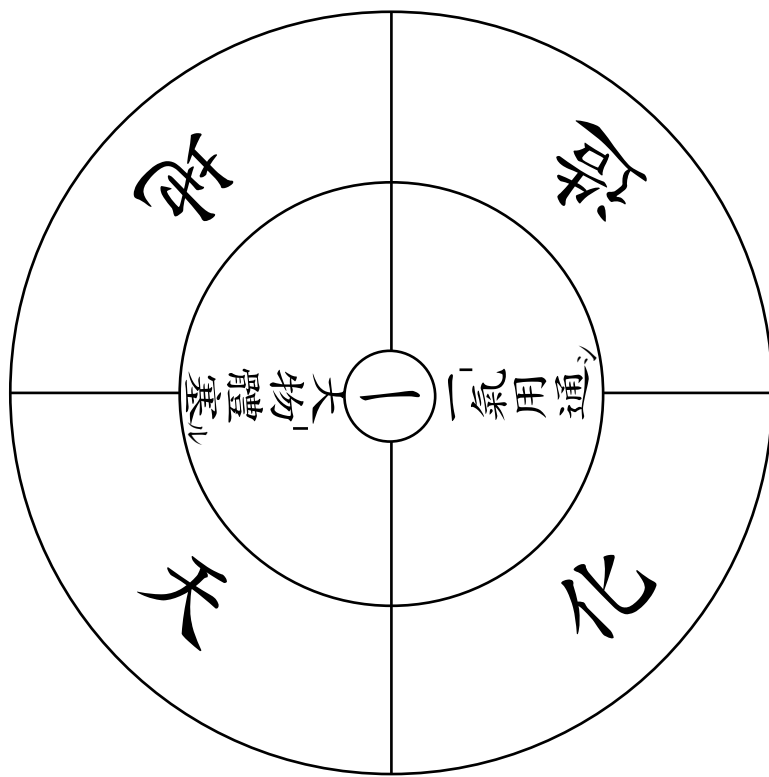
四八三四

萬ばん事じは網いん縊うんす、

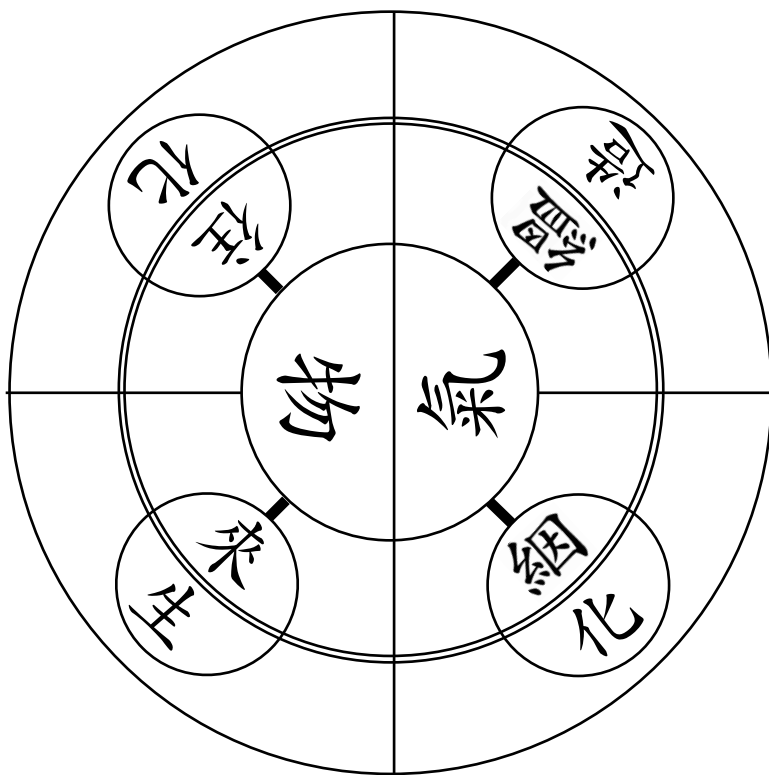
四八三五
四八三六
四八三七
四八三八
四八三九
四八四〇

天徳は則ち自ら然る、其の道は則ち成、天態は則ち常、天體は則ち立なり、
神徳は則ち然ら使む、神の道は則ち爲、神態は則ち變、神體は則ち活なり、
物は則ち自から常立の體を成す、
神は則ち變活の用を爲さ使む、
是の體は則ち天地なり、
是の用は則ち造化なり、
是を以て。

天地造化圖



造化生化圖



循環鱗比圖

